
日本ロシア文学会
第59回定例総会・研究発表会

2009年10月24日(土)～25日(日)
筑波大学

日本ロシア文学会
共催：筑波大学大学院人文社会科学部研究科

第59回（2009年度）定例総会・研究発表会は、来たる10月24日（土）、25日（日）の両日、筑波大学（筑波キャンパス）で開催されます。また、10月23日（金）には、プレシンポジウムが開催されます。

研究発表会では、3会場23本の発表のほか、2本のワークショップとポスターセッション、および特別講演会が開かれます。ふるってご参加ください。

以下、日程をご確認の上、同封のはがきで当日のご予定を10月16日（金）までにお知らせいただくようお願いいたします。

当日会場での録音、ならびに書籍等の販売を希望される方は、事務局までお申し出ください。

10月23日（金）			
プレシンポジウム：ロシア文学と日本			
15:00-17:30 大学会館ホール			

10月24日（土）				
開会式 09:20-09:35 3A棟204講義室				
		第1会場 3A棟202講義室	第2会場 3A棟203講義室	第3会場 3A棟304講義室
研究発表	09:40-10:10	A01	B01	C01
	10:15-10:45	A02	B02	C02
	10:50-11:20	A03	B03	C03
	11:25-11:55	A04		C04
各支部総会	12:00-12:55	3A棟 関東支部：405講義室，中部支部：407講義室		
				理事会 13:00-14:30 3A棟408講義室
ワークショップ	13:30-15:30	D-α 3A棟202講義室	D-β 3A棟203講義室	
定例総会	16:00-18:00	大学会館ホール		
懇親会	18:30-20:30	大学会館 レストラン・プラザ		

10月25日（日）				
		第1会場 3A棟202講義室	第2会場 3A棟203講義室	第3会場 3A棟304講義室
研究発表	09:40-10:10	A05	B04	A09
	10:15-10:45	A06	B05	A10
	10:50-11:20	A07	B06	A11
	11:25-11:55	A08	B07	A12
各種委員会 (新委員会)	12:35-13:30	3A棟 編集委員会：212講義室，広報委員会：213講義室，国際交流委員会：311講義室，ロシア語教育委員会：305講義室		
講演：トルストイ『戦争と平和』における歴史的連続性の構築 13:30-15:00 3A棟204講義室				

会場案内（3A棟）

〈受付・本部〉207講義室

〈ポスターセッション〉308講義室

〈休憩室〉 214講義室，306講義室

〈販売・展示〉209講義室

〈発表関係者控室〉第1会場発表関係者：212講義室，第2会場発表関係者：213講義室，第3会場発表関係者：311講義室

*発表者，司会者，参加者には，会の運営において，時間厳守にご協力をお願いします。

プレシンポジウム

ロシア文学と日本

—縦横に語る—

平岡敏夫 筑波大学名誉教授 (日本近代文学)

「明治の文学者とロシア文学」

阿部軍治 筑波大学名誉教授 (ロシア文学)

「白樺派とトルストイ」

沼野充義 東京大学教授 (スラヴ文学)

「村上春樹とチェーホフ」

(司会) 加藤百合 筑波大学准教授 (ロシア文学・比較文学)

日時: 10月23日(金) 15:00~17:30

会場: 筑波大学(筑波キャンパス) 大学会館ホール

○日本の文学者達が百二十年以上にわたって読み続け、魂を揺さぶられ続けた十九世紀ロシア文学の深甚な影響について、各先生方のご専門の立場からお話いただきます。我々日本人にとってのザ・文学、ロシア文学は日本文学史の基底に流れ続けています。

○会場からのご質問、ご意見にもお答えいただく予定です。

○各分野一流の先生方が一堂に会する豪華な座談会が実現しました。この機会にぜひご参集ください。公開(無料)です。

*大学会館内に設置されている「筑波大学ギャラリー」の看板の見える「大学会館前」バス停で下車。

懇親会のご案内

日時: 10月24日(土) 18:30~20:30

会場: 筑波大学(筑波キャンパス) 大学会館 レストラン・プラザ

会費: 6,000円(院生会員は4,000円)

*懇親会場は、総会・プレシンポ会場と同じ建物内です。どうぞふるってご参加ください。

参加ご予約の方は同封のはがきでお知らせください(準備の都合上、10月16日(金)までに必ず)。

研究発表 10月24日(土) 午前, 25日(日) 午前, 3A棟

◎はブロックの責任者(担当理事)

第1会場(202講義室): 文学(A)

	番号	発表者	題目	司会者
ブロック① 24日午前	A01	上田洋子	シギズムンド・クルジジャンフスキーの散文における演劇的要素	◎楯岡求美 岩本和久 小椋彩
	A02	梶山祐治	書かれなかった「天国篇」 —パステルナーク『盲目の美女』—	
	A03	前田しほ	女性にとっての戦争 —パノーヴァ『道づれ』とアレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』—	
	A04	Жданов В.Н., Коваленко Ю.А., Судзуки Д.	Гоголь как миф (в связи с 200-летним юбилеем Н.В.Гоголя и объявленным ЮНЕСКО годом Гоголя)	
ブロック④ 25日午前	A05	秋月準也	ミハイル・ブルガーコフ作品における「住宅管理人」の役割	◎貝澤哉 長谷川章 武田昭文
	A06	石原公道	ブルガーコフ研究の現在	
	A07	Chen Yin-Yin	Пушкинские мотивы в «малой прозе» М.Б.Булгакова	
	A08	古宮路子	ユーライイ・オレーシャ『恋』における描出の問題	

第2会場 (203 講義室) : 言語 (B)				
	番号	発表者	題 目	司会者
ブロック② 24 日午前	B01	三浦由香利	場所表現における誤り修正への取り組み —実践と結果—	◎林田理恵 伊藤美和子 水野晶子
	B02	Шатохина Г.С.	Использование материалов Звукового корпуса русского языка в японской аудитории (на материале спонтанных монологов)	
	B03	Сивакова С.	Специфика технологии подготовительного обучения грамоте билингвальных детей в Японии	
ブロック⑤ 25 日午前	B04	鈴木理奈	数量性の機能意味的カテゴリー —意味と形態による言語構造—	◎金田一真澄 柳町裕子 渡辺克義
	B05	金子百合子	ロシア語と日本語のアスペクト体系における「限界」意味概念の広がり	
	B06	Гречко В.М.	На перекрестке лингвистики и идеологии: И.А.Бодуэн де Куртэнэ о международном вспомогательном языке	
	B07	佐々木照央	『エヴゲーニイ・オネーギン』エスペラント訳の特徴と意義	
第3会場 (304 講義室) 24 日 : 文化, 芸術, 思想 (C), 25 日 : 文学 (A)				
	番号	発表者	題 目	司会者
ブロック③ 24 日午前	C01	有泉和子	日露戦争に至る道 —露日対立原因としての日清戦争—	◎木村崇 靱内裕子 大須賀史和
	C02	沢田和彦	二葉亭四迷の新発見露文書簡	
	C03	坂中紀夫	オブローモフ主義におけるメランコリーの歴史社会学的意義について	
	C04	塚田力	ロクチェフ『わが回想』における新疆のペンテコステ派の体制選択	
ブロック⑥ 25 日午前	A09	木寺律子	『悪霊』における仮面の問題	◎松本賢一 佐藤千登勢 番場俊
	A10	覚張シルビア	トルストイとゾラの都市空間	
	A11	中村唯史	エイヘンバウム『私の年代記』考	
	A12	野中進	まなざしと声—A.プラトーフにおける鏡像忌避とその周辺—	

ワークショップ 10月24日(土)午後, 3A棟

会場	番号	発言者	題 名
第1会場 202 講義室	D-a	司会者: 浦雅春 報告者: 望月哲男, 秦野一宏, 安達大輔, 諫早勇一 討論者: 野中進	生誕 200 周年記念 ゴーゴリ文学への問いかけ
第2会場 203 講義室	D-b	司会者: 斉藤陽一 報告者: 番場俊, 宇佐見森吉, 西中村浩	新しい初修外国語カリキュラムとロシア語教育

ポスターセッション 10月24日(土)~25日(日), 3A棟

308 講義室	E-a	小林潔, 尾子洋一郎, 堤正典	ロシア語初学者用語彙データベースの制作と運用
---------	-----	-----------------	------------------------

特別講演会

題目：トルストイ『戦争と平和』における歴史的連続性の構築

Конструкция исторической непрерывности в романе Л.Н.Толстого «Война и мир»

講師：オックスフォード大学 アンドレイ・ゾーリン教授 Андрей Леонидович Зорин

経歴：1958年、モスクワ生まれ。モスクワ大学卒業。ロシア国立人文大学教授、スタンフォード大学客員教授、ハーヴァード大学客員教授、ニューヨーク大学客員教授、ミシガン大学アナーバー校客員教授などを経て、2004年より現職。文学博士。

18～19世紀前半のロシア文学、ロシア史を主たる専門領域とし、主著「Кормя двуглавого орла: Русская литература и государственная идеология конца XVIII—начала XIX века」（モスクワ、2001）をはじめ、数多くの著作がある。現代ロシア文学・文化に関する発言も多い。また、これまでに、「Новое литературное обозрение」誌、「Slavic Review」誌、「Cahiers de Monde Russe」誌といった各国の学術誌や、叢書「Библиотека поэта」などの編集委員を務めている。

現在、日本学術振興会外国人招聘研究者として来日中。

* 講演はロシア語で行われます。通訳はつきません。

司会：鳥山祐介（千葉大学准教授）

日時：10月25日（日）13:30～15:00

会場：筑波大学（筑波キャンパス）3A棟204講義室

会場：筑波大学（筑波キャンパス）への交通機関（巻末のアクセス図も参照）

筑波大学（筑波キャンパス）

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

受付・研究発表会・特別講演会会場は3A棟（「第三エリア前」バス停下車）、プレシンポジウム・総会・懇親会会場は学生会館（「学生会館前」バス停下車）です。2会場間の距離は、徒歩5分程度です。当日は、バス停周辺に人を配置し、案内板を用意します。

* 3A棟は筑波キャンパス中地区、学生会館は南地区に位置します。キャンパスマップの
中地区（http://www.tsukuba.ac.jp/access/map_central.html）、
南地区（http://www.tsukuba.ac.jp/access/map_south.html）でご確認ください。

- つくばエクスプレス（TX）線利用 *TX「つくば」駅は「つくばセンター」の地下です。
 - TX「秋葉原」駅 → 終点TX「つくば」駅（快速：1時間に2本、所要時間45分、区間快速：1時間に2本、所要時間52分）
TX「つくば」駅A4出口より出て路線バス（関東鉄道バス）に乗り換え「つくばセンター」5番乗り場にて、「筑波大学中央」行または「筑波大学循環（右回り）」行（10～20分間隔）に乗車、受付・研究発表会・特別講演会会場（3A棟）へは「第三エリア前」バス停で下車。プレシンポジウム・総会・懇親会会場（学生会館）へは「学生会館前」バス停で下車。
- 高速バス利用
 - 羽田 → つくばセンター（「つくばセンター」行：1時間に1本、所要時間120分）
「つくばセンター」で路線バスに乗り換えてからは、上記1.を参照。
- JR（常磐線）利用
 - 上野 → ひたち野うしく、荒川沖、土浦（1時間に2、3本、所要時間60分）
路線バスに乗り換え ひたち野うしく、荒川沖、土浦 → 「筑波大学中央」行（1時間に2、3本、所要時間50分）に乗車、受付・研究発表会・特別講演会会場（3A棟）へは「第三エリア前」バス停で下車。プレシンポジウム・総会・懇親会会場（学生会館）へは「学生会館前」バス停で下車。
- 自動車利用
 - 桜土浦I.C.下車、筑波方面へ左折
→大角豆（ささぎ）交差点右折
→県道55号線〈東大通り／ひがしおおどおり〉を北に直進
→筑波大学中央入り口左折〈本部棟前〉（約8km）

●国道6号線利用

荒川沖（県道55号線〈東大通り〉を北へ）
→大角豆（ささぎ）交差点を通過（直進）
→筑波大学中央入り口左折〈本部棟前〉

駐車場は「第三エリアゲート（K25）」（2009年10月23日8時～25日19時まで使用可）です。
駐車場の位置は、3L棟と第三体育館の北側の大きな駐車場です。

会場校からのお知らせ

☆今回の総会・研究発表会では、昨年度同様、**宿泊の斡旋はございません**。宿泊施設につきましては、参加者ご自身でインターネットあるいは電話予約にてお願いいたします。筑波大学にアクセスしやすいホテル（サイト予約が可能）につきまして、簡単な情報提供のみさせていただきます。

TXつくば駅周辺

オークラフロンティアホテルつくば (<http://www.okura-tsukuba.co.jp> Tel: 029-852-1112)
ダイワロイネットホテルつくば (<http://www.daiwaroynet.jp> Tel: 029-863-3755)
ホテルグランド東雲 (<http://www.hg-shinonome.co.jp> Tel: 029-863-3755)

研究学園駅周辺（TX, またはバスで「つくば」駅まで移動が必要です）

ホテルベストランド (www.hotel-bestland.co.jp Tel: 029-863-1515)

ホテル予約サイト

じゃらん (<http://www.jalan.net>)
楽天トラベル (<http://travel.rakuten.co.jp/biz>)
Yahoo!JAPAN ビジネストラベル (<http://biz.travel.yahoo.co.jp>)
るるぶトラベル (<http://rurubu.travel>)

大学周辺ホテルマップ

Plazza つくばホテルマップ (<http://www.tsukuba.com/hotelmap/index.html>)

☆弁当につきましても手配はございません。

食事につきましては、

10月24日（土）は、発表会・講演会場である3A棟1階のフードコートと第二エリアの学食をご利用できます。また中央図書館内で Starbucks Coffee をご利用いただけます。

10月25日（日）は学食などが利用できませんので（Starbucks Coffee のみご利用可）、参加者各自で工夫して食事をお取りください。会場の周辺地域（筑波キャンパス南地区／天久保3丁目）にコンビニ、レストラン、喫茶店などがありますが、徒歩7分程度かかります。

実行委員会・お問合せ先

〒305-8571 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻

白山 利信（会場校責任者）

Tel/Fax: 029-853-4145

E-mail: usuyama.toshinobu.gf@u.tsukuba.ac.jp

学会当日は、090-8345-2348（白山利信携帯）、090-9313-4681（加藤百合携帯）にご連絡ください。

日本ロシア文学会第 59 回研究発表会

報告要旨（予稿）集

(2009 年 10 月 24 日～25 日, 筑波大学)

-
- A01 上田 洋子 シギズムンド・クルジジャンフスキイの散文における演劇的要素
- A02 梶山 祐治 書かれなかった「天国篇」—パステルナーク『盲目の美女』—
- A03 前田 しほ 女性にとっての戦争—パノーフ『道づれ』とアレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』
- A04 В.Жданов, Ю.Коваленко, Д.Судзуки. Гоголь как миф (в связи с 200-летним юбилеем Н.В.Гоголя и объявленным ЮНЕСКО годом Гоголя)
- A05 秋月 準也 ミハイル・ブルガーコフ作品における「住宅管理人」の役割
- A06 石原 公道 ブルガーコフ研究の現在
- A07 Chen Yin-Yin. Пушкинские мотивы в «малой прозе» М.А.Булгакова
- A08 古宮 路子 ユーレイ・オレーシャ『恋』における描出の問題
- A09 木寺 律子 『悪霊』における仮面の問題
- A10 覚張 シルビア トルストイとゾラの都市空間
- A11 中村 唯史 エイヘンバウム『私の年代記』考
- A12 野中 進 まなざしと声—A.プラトーフにおける鏡像忌避とその周辺—
- B01 三浦由香利 場所表現における誤り修正への取り組み—実践と結果—
- B02 Г.Шатохина. Использование материалов Звукового корпуса русского языка в японской аудитории (на материале спонтанных монологов)
- B03 С.Сивакова. Специфика технологии подготовительного обучения грамоте билингвальных детей в Японии
- B04 鈴木 理奈 数量性の機能意味的カテゴリー—意味と形態による言語構造—
- B05 金子百合子 ロシア語と日本語のアスペクト体系における「限界」意味概念の広がり
- B06 В.Гречко. На перекрестке лингвистики и идеологии: И.А.Бодуэн де Куртэнэ о международном вспомогательном языке
- B07 佐々木照央 『エヴゲーニイ・オネーギン』エスペラント訳の特徴と意義
- C01 有泉 和子 日露戦争に至る道—露日対立原因としての日清戦争—
- C02 沢田 和彦 二葉亭四迷の新発見露文書簡
- C03 坂中 紀夫 オブローモフ主義におけるメランコリーの歴史社会学的意義について
- C04 塚田 力 ロクチェフ『わが回想』にみる新疆のペンテコステ派の体制選択
- D-α ワークショップ 生誕 200 周年記念 ゴーゴリ文学への問いかけ (浦雅春, 秦野一宏, 安達大輔, 諫早勇一, 望月哲男, 野中進)
- D-β ワークショップ 新しい初修外国語カリキュラムとロシア語教育 (斉藤陽一, 番場俊, 宇佐見森吉, 西中村浩)
- E-α ポスターセッション ロシア語初学者用語彙データベースの制作と運用 (小林潔, 尾子洋一郎, 堤正典)
-

日本ロシア文学会

2009 年 9 月

**Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 59th Annual Assembly
of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature
(Tsukuba University, 24–25 October, 2009)**

- A01** Йо. Уэда. Театральные элементы в прозе Сигизмунда Кржижановского
- A02** Ю. Каджияма. Незаконченный «Рай»: «Слепая красавица» Б.Пастернака
- A03** С. Маэда. Война для женщин: «Спутники» В.Пановой и «У войны не женское лицо» С.Алексиевич
- A04** В. Жданов, Ю. Коваленко, Д. Судзуки. Гоголь как миф (в связи с 200-летним юбилеем Н.В.Гоголя и объявленным ЮНЕСКО годом Гоголя)
- A05** Д. Акидзуки. Роль «управдома» в произведениях М.Булгакова
- A06** К. Исихара. Сейчас как занимаются Булгаковым?
- A07** Чэнь Инь-инь. Пушкинские мотивы в «малой прозе» М.А.Булгакова
- A08** М. Комия. Вопросы об изображении в «Любви» Ю.Олеси
- A09** Р. Кидэра. Проблема маски в «Бесах»
- A10** С. Какубари. Изображение городского пространства в произведениях Л.Толстого и Э.Золя
- A11** Т. Накамура. Над «Моим временником» Б.Эйхенбаума
- A12** С. Нонака. Взгляд и Голос: Уклонение от зеркала и другие мотивы в творчестве А.Платонова
- B01** Ю. Миура. Обстоятельства места: типичные ошибки студентов и пути к их исправлению на начальном этапе обучения: опыт практических занятий
- B02** Г. Шатохина. Использование материалов Звукового корпуса русского языка в японской аудитории (на материале спонтанных монологов)
- B03** С. Сивакова. Специфика технологии подготовительного обучения грамоте билингвальных детей в Японии
- B04** Р. Судзуки. Функционально-семантическая категория именной атрибутивной параметрической характеристики
- B05** Ю. Канэко. Разработанность понятия «предела» в аспектуальных системах русского и японского языков.
- B06** В. Гречко. На перекрестке лингвистики и идеологии: И.А.Бодуэн де Куртенэ о международном вспомогательном языке
- B07** Т. Сасаки. О специфике и значении эсперантского перевода «Евгения Онегина»
- C01** К. Ариидзуми. Путь к Русско-Японской войне: Японо-Китайская война как причина противостояния России и Японии
- C02** К. Савада. Неизвестные письма Фтабатэя Симэя деятелям русской политической эмиграции
- C03** Н. Саканака. Обломовщина как тип меланхолии: социально-исторический аспект
- C04** Ц. Цукада. Выбор строя Синьцзянских пятидесятников в «Моих воспоминаниях» Г.И.Локтева
- D-α** **Workshop.** Four Different Approaches to Nikolai Gogol (Celebrating the 200th Anniversary of the Writer's Birth) (M. Ura, K. Hatano, D. Adachi, Y. Isahaya, T. Mochizuki, S.Nonaka)
- D-β** **Workshop.** Новые университетские программы по иностранным языкам для студентов первого курса и преподавания русского языка (Е. Сайто, С. Бамба, С. Усами, Х. Нисинакамура)
- E-α** **Poster Session.** Database of Fundamental Russian Vocabulary Used for Educational Purposes: Construction and Utilization in Japanese Classrooms. (K. Kobayashi, Y. Ogo, M. Tsutsumi)
-

【A01】シギズムンド・クルジジャンフスキイの散
文における演劇的要素 上田 洋子

作家シギズムンド・クルジジャンフスキイ (1887-1950) は生涯にわたって演劇の場をひとつの活動拠点としていた。もっとも、クルジジャンフスキイは作家として戯曲を提供することはまれであり、主に俳優教育に携わり、いわば演劇創造の舞台裏をサポートする立場にあった。クルジジャンフスキイは演劇の場での経験を主に演劇論として残しているが、興味深いのは、それら演劇論における考察が散文作品の中に入り込み、テーマやモチーフとして展開されていることである。

今回の発表では、クルジジャンフスキイの散文における演劇の要素について、1920 年代の演劇論と中篇『文字殺しクラブ Клуб убийц букв』(1926) を中心に考察してみたい。

「演劇とは何か」「俳優とは何か」という大きな問題が、舞台と客席の両側の視点から考察されている 1923 年の「演劇に関する哲学原理 Философема о театре」は、クルジジャンフスキイの演劇論のうちもっとも重要なものである。また、1923-24 年にカーメルヌイ劇場の機関紙「モスクワ・カーメルヌイ劇場の 7 日間 7 дней МКТ」に寄稿された 17 本の記事においても、当時のカーメルヌイ劇場の演劇戦略に沿ってはいるものの、やはりこの作家独自の演劇観が表明されている。

これら 1920 年代の演劇論で扱われたテーマやモチーフは散文作品に取り込まれてゆく。たとえば「演劇に関する哲学原理」で論じられる、俳優と役の関係をめぐむ問題や、中世フランスにおいて道化と聖職者を兼任していた放浪芸人ゴリアルドのモチーフは、『文字殺しクラブ』でそれぞれ独立したエピソードとして展開されている。この作品ではまた、「モスクワ・カーメルヌイ劇場の 7 日間」におけるメイエルホリドのピオメハニカに対する批判がアンチ・ユートピアの描写に応用されている。さらに、「演劇に関する哲学原理」の中心的主張である、演劇の上演というその場限りで消滅してしまうものの《存在意義》の証明は、語られたのみで書物の身体を纏わない物語という虚構の存在で蔵書を満たすことを試みる人々を描いた『文字殺しクラブ』の中心テーマと呼応している。

今回の発表ではクルジジャンフスキイが演劇論で提示した上のようなテーマやモチーフの文学作品における展開の考察を通して、この作家の散文作品に見られる演劇的要素がいかなるもので、どのような機能を果たし、いかなる効果を生み出しているのか明らかにすることを試みる。

(うえだ ようこ, 早稲田大学)

【A02】書かれなかった「天国篇」
—パステルナーク『盲目の美女』— 梶山 祐治

パステルナーク研究には詩人として、作家として、およそ二つのアプローチがあるが、従来戯曲作品については、あたかも存在しないかのような扱いを受けてきた。2003-05 年にモスクワで出版された全集の解説によれば、パステルナークは生涯で 16 もの戯曲作品に手を染めているが、戯曲として収録されている(現存の)作品はわずか 2 作品、『この世界』(1942)、『盲目の美女』(1959-60) のみで、どちらも未完である。パステルナークの戯曲作品は、全体としても個々としても、きわめて不完全なものであるが、デビュー前の習作には、「非対話的なドラマであり非演劇的な対話」という副題が付けられた、演劇をモチーフにしたもののもっとも早い萌芽に位置づけられる作品が存在する。さらに 1910 年代には、演劇的な要素をテーマとした最初の散文作品『アペレスの描線』(1915)、劇詩『ロベスピエールの死』(1917)、劇曲の形式を借用した中篇『対話』(1918) の 3 作品が書かれている。これらの作品は、スタイルの模索という側面は当然あったにしろ、彼の文学活動の中にドラマトゥルギーへの志向が存在したからこそ書かれたと考えられる。おそらく彼は詩人としての天分にあまりに恵まれていたがために、そうした志向は各々の作品において断片的なテーマとして姿を見せるに留まったのではないだろうか。

以上から、パステルナークが早い段階から演劇に対する興味を示していたことは明らかである。ライフワークである『ドクトル・ジヴァゴ』を完成させ、最後の詩集『晴れよう時』(1959) をまとめた後、再び大きな仕事の形式として選択したのが戯曲であり、それこそが『盲目の美女』として彼の劇作品を代表するはずであった。構想ではロシアの 19 世紀全体を視野に入れたというスケールの大きさを持ちながら、未完であることが研究の足枷になり、これまで注目されることは極端に少なかった。だがパステルナークは新しい仕事にかなりの自信を持ち、それを『ドクトル・ジヴァゴ』に匹敵する仕事に位置づけていたのである。ただ病により、その機会は永久に失われてしまった。

この報告では、ドラマトゥルギーの決算を通して、パステルナークが晩年創造しようとした神話、すなわち「天国篇」の全体を明らかにし、また、その特徴を彼の持つ作品世界へと還元することで全体像を更新することを試みる。劇作家パステルナークの素顔を垣間見ることは、単に彼の新しい一面を知るだけでなく、そこから芸術家としての全体が浮かび上がることもつながる。(かじやま ゆうじ, 東京大学院生)

【A03】女性にとっての戦争

—パノーヴァ『道づれ』とアレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』—

前田 しほ

第二次世界大戦の勝敗は、その後の戦争観の違いに決定的な差をもたらした。「平和」な日本から見ると、徴兵制が存在し、子どもが学校で銃の扱いを学び、軍事パレードに熱狂するロシアの「戦争文化」は奇異に映る。他方、ロシアでは戦争は「文化」といってもよいほど、生活に根ざした身近な存在である。中でも対独戦は、「大祖国戦争」と呼ばれることが示すように、ソヴィエト・ロシアにとっては、非常に重要な記憶に残すべき出来事である。「大祖国戦争」を舞台とした小説・映画は、ステレオタイプ化した大衆娯楽として、ジャンルとして確立している。

しかしながら、100万人とも言われる女性兵士の存在については近年までほとんど語られることがなく、語られても、ロマンティックな欲望の対象として位置づけられ、格下げされた他者として描かれることが多かった。ところが、ラディカルな女性「解放」と「平等」が実施されたソ連では、第二次世界大戦時に、女性は銃後を支えるだけでなく、前線に志願し、戦闘に参加した。戦後も、内戦や大テロルの犠牲者をも合わせ、膨大な数の男性が亡くなっていたため、社会・家庭の復興は女性の肩にかかった。

ジェンダー研究の観点から、近年のロシア女性文学の隆盛を考察する上で、ソ連期の女性のアイデンティティの形成と、社会主義体制下で培われたメンタリティを無視することはできない。その中でも、戦争経験は、重要な役割を負うべきものである。

そこで、本報告では、戦線と銃後を往復する衛生列車の活躍と人間模様を描くヴェーラ・パノーヴァ『道づれ』(1946)と、元女性兵士の証言を記録したベラルーシのロシア語作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』(1985, 2004)を取り上げる。記憶が生々しい戦後まもなく発表された『道連れ』と、年老いた元兵士のオーラル・ヒストリーという、時代も様式も異なる二人の女性作家が描く戦争を比較することにより、「偉大」な物語とそれに収斂されえない個人の経験について考察する。

(まえだ しほ、北海道大学スラブ研究センター)

【A04】ゴゴль как миф (в связи с 200-летним юбилеем Н.В.Гоголя и объявленным ЮНЕСКО годом Гоголя)

Жданов В.Н., Коваленко Ю.А., Судзуки Д.

Н.В.Гоголь остаётся наиболее таинственным писателем в истории русской литературы, судьба и творчество которого настолько оплетены мифами и легендами, а имя столь многоаспектно духовно развёрнуто пишущими о Гоголе, как по отношению к реальности, так и к инобытию, что сам писатель и его творческая индивидуальность стали полноценным, но незавершённым мифом.

Его полноценность заключена в логической замкнутости смысловой сущности, дающей разные варианты Гоголя: гениального художника-реалиста и затем ренегата у Белинского; создателя натуральной школы, — у Достоевского («Все мы вышли из-под гоголевской «Шинели»); мистика, страдающего маниакально-депрессивным психозом, — у многочисленных биографов; предшественником аналитических направлений искусства XX века у Бердяева; гением, угадавшим архетипы русской жизни и революции, посмертной жертвой сталинского вандализма, и духовным отцом Булгакова, Пелевина, Королёва — у Чудаковой и многочисленных современных исследователей; художником, максимально выразившим идею русской пасхальности, — у Есаулова.

Незавершённый миф Гоголя состоит не только в продолжении процесса концептуального осмысления писателя, но и в сохранении его неразгаданности. К числу загадок жизни Гоголя относят и его детские шалости, и отношение к женщинам, и таинственную болезнь и не менее таинственную смерть с последующей в советское время эксгумацией и двойным переносом могил.

Но более загадочными продолжают оставаться гоголевские творческие искания: он и романтик, и мистик, и сатирик, и реалист, и модернист, и православный писатель, он как бы крутится между чёртом и Богом. Загадочны его герои, которые в разные моменты нашей истории возникают в разной ипостаси. Например, Хлестаков был представлен то, как карикатурный тип, то как развлекающий фигляр, то как злобная фигура, под личиной которой скрывается Антихрист (Например, в книге В. Глянца «Гоголь и Апокалипсис»).

Эта непреходящая концентрация загадочности вокруг Гоголя, исключительная эстетическая и идеологическая полярированность оценок писателя, синтезирующих его смысловую сущность, актуализирует фигуру Гоголя как миф.

(ジダーノフ・ヴラヂーミル, コワレンコ・

ユーリヤ, 鈴木淳一, 札幌大学)

【A05】ミハイル・ブルガーコフ作品における「住宅管理人」の役割
秋月 準也

『巨匠とマルガリータ』には、悪魔コロヴィエフから賄賂を受け取って住宅を提供し、密告によって連行される住宅組合議長 (председатель жилищного товарищества) ニカノール・ボソイが登場する。その他の同時代のモスクワを扱った作品においてもブルガーコフは住宅管理人 (управдом) や住宅委員会議長 (председатель домкома) といった人物をしばしば配置している。本報告の目的はこのような「住宅の管理者」たちの比較分析を通して、多面的な構成を持つブルガーコフの文学世界の一端を解き明かすことである。

ブルガーコフ作品における住宅管理人のモチーフの原型は、1924 年に《ナカヌーニェ》紙に発表されたフェリエトン『20 年代のモスクワ』の中で、密造酒を飲み、アコーディオンを弾いて、傍若無人にふるまう管理人ヴァシーリー・イヴァーノヴィチに求めることができるが、ブルガーコフが目にしたのは管理人が担っていた行政的な役割であった。ソヴィエト政権下の住宅委員会や住宅管理局は、食料の配給や住宅の再配分を行うために身分証明書をはじめとした各種証明書の発行業務も担当し、住宅のみならず個々の住民を管理する機能も果たしていた。したがって、居住面積の配分を決定する権限を持った「住宅管理人」を扱った作品にはふたつの主題が生まれる。ひとつは居住面積の切り詰めという主題 (異なる階層の人間を同居させることで主人公を苦しめる) であり、もうひとつは居住面積の拡張という主題 (賄賂を受け取って規定よりも広い居住面積を主人公のために確保する) である。別の角度から見れば、身分証明書を発行する「住宅管理人」は単なる風刺対象のレベルにとどまらず、ブルガーコフ文学において空想的なものを現実世界に組み込む役割を担っていたとみなすことも可能であろう。例えば中編小説『犬の心臓』では、居住面積の切り詰めをめぐってプレオブラジェンスキイ教授と激しく対立していた住宅管理局議長シボンデルが、教授が生み出してしまった人造人間シャリコフを積極的に援助し、彼に正式な身分証明書と教授宅に居住する権利を与えている。『巨匠とマルガリータ』において悪魔に住居を提供するニカノール・ボソイもまた、悪魔という非現実的存在がモスクワで公的な承認を獲得していくプロセスの中で、重要な手続きを行っているのである。以上のような複雑な機能を持つ「住宅管理人」は、ブルガーコフの作品世界をリアルとファンタジーの両面から解明するための絶好の題材のひとつと考えられる。

(あきづき じゅんや, 北海道大学院生)

【A06】ブルガーコフ研究の現在
石原 公道

ブルガーコフ未亡人エレナの死 (1970) 後、ロシア国立図書館ブルガーコフ・アルヒーフは、M. チュダコワと後任の B. ローセフという主任研究員を得て、研究成果を発表してきたが、ローセフの死後、その役割を一応閉じたようだ。前者は『巨匠とマルガリータ』の豪華本を上梓し (2001)、後者の 8 巻本選集編纂、特にその書簡集のコメンタリー (2002) と『巨匠とマルガリータ』全 9 編の遺稿集刊行 (2006) は労作であろう。

発表者は 2006 年に「最初のブルガーコフ伝記とその顛末」と題して発表を行い、ブルガーコフの墓所ほか、『巨匠とマルガリータ』のテキスト、未亡人エレナ等について話題を提供したが、それらの課題はなお未解決のようである。

それはそれとして、上記 2 名にさらに浩瀚な『ブルガーコフ系譜』(2003) の著者 B. ミャフコフも鬼籍に入った今、そして、おそらくチュダコワに先駆け、基礎的研究を始めた JI. ヤノーフスカヤも含めてエレナに関わっての研究は終焉し、直接テキストに向き合い、過去の研究成果を相互検討する時期に移行したようである。ЖЗЛにも A. ヴァルラーモフによる『ミハイル・ブルガーコフ』(2008) が加わり、またスターリンに関して、B. サルノフによる大部 2 巻の『スターリンと作家たち』(2008) が現れ、ブルガーコフについても 200 頁弱が費やされている。

また個別研究も進展し、B. グドコフの『ブルガーコフとポポフ 往復書簡集』(2003) はローセフの註釈をなお進めたものであり、莫逆の友 C. ポポフのもとに在ったであろう『巨匠とマルガリータ』のテキストの行方を考えるための基礎資料となっていると思われる。かつてブルガーコフ最後の、若きスターリンを主人公とした問題の戯曲『バトゥーム』を正面から取り上げた M. ペトローフスキイが『巨匠と都市』(2008, 増補版) でキエフを中心に作品世界を読み解いてもいる。また特筆すべきは、ブルガーコフの巷間での人気とも相俟って B. ソコロフによる 1997 年刊『ブルガーコフ百科』は 2005 年刊 3 版が通行している。

こうした研究状況にあつて、発表者にとって興味を掻き立てられることは、前回とも重なるのであるが、エレナの功罪である。多くの研究者が功のみで彼女を見ていたことで、見落としていることがあるのではないのか、ということの再提案を中心にブルガーコフ研究の現在を考えてみたい。

(いしはら きみみち, 早稲田大学大学院修了)

【A07】 Пушкинские мотивы в «малой прозе»

M.A. Булгакова

Чэнь Инь-инь

Художественное творчество одного из крупнейших писателей XX столетия М.А. Булгакова отличается теснейшими связями с русской классической литературной традицией, что в литературоведении определяется термином «интертекстуальность».

Интертекстуальность как приём часто использовали и литературные предшественники Булгакова — русские писатели XIX века. Интертекстуальное богатство булгаковской прозы на сегодняшний день выявлено ещё далеко не полностью, хотя в последние годы появился ряд работ, рассматривающих связи писателя с творчеством Н.В.Гоголя, Н.Е.Салтыкова-Щедрина, Л.Н.Толстого, Ф.М.Достоевского и др. Интертекстуальное взаимодействие Булгакова с наследием А.С.Пушкина изучено в меньшей степени, поэтому мы считаем возможным посвятить этому вопросу настоящую статью. Материалом исследования послужили тексты произведений М.А.Булгакова («Записки на манжетах», «Ханский огонь») и художественные произведения А.С.Пушкина.

В «Записках на манжетах» описываются обстоятельства реальной жизни Булгакова во Владикавказе и его участие в диспуте «Пушкин и его творчество с революционной точки зрения». Ниспровергатели Пушкина уверяли, что у нового общества будет новое «пролетарское искусство». Булгаков был убежден, что наследие Пушкина лежит в основании русской культуры, что общество, лишённое культуры, погибнет. Таким образом, выступление Булгакова превратилось в отстаивание гражданской позиции, что для него, вчерашнего участника белого движения, было совсем небезопасно.

Среди произведений «малой прозы» Булгакова рассказ «Ханский огонь» занимает особое место. Здесь Булгаков впервые переходит к повествованию от третьего лица — прежде в его произведениях повествование всегда велось от первого лица. Кроме того, этот рассказ стал для писателя одним из первых опытов объективного эпического повествования о современности. Анализ текста позволяет предположить, что этот рассказ представляет собой своеобразную вариацию на тему одного эпизода из повести Пушкина «Дубровский» (сожжение родового гнезда).

Однако повествование в формах классической русской прозы не получило в творчестве Булгакова дальнейшего развития. Позднее на пути к эпической форме на материале современности Булгаков обратился к гротеску.

ассистент факультета славянских языков
Государственного университета Чжэнчжи/
докторант факультета русского языка
Университета китайской культуры, Тайбэй,
Тайвань

Ключевые слова: Булгаков, Пушкин,
интертекстуальность, литературная традиция.
(Chen Yin-Yin, 台湾国中国文化大学院生)

【A08】 ユーリイ・オレーシャ『恋』における描出の問題

古宮 路子

小説『羨望』(1927)で華々しく文壇にデビューした翌年、ユーリイ・オレーシャは「自分の最良の作品」と呼ぶ短編小説『恋』(1928)を発表した。それは、主人公の青年シュヴァーロフの恋する心情を反映して、彼の眼に世界がありのままではなく美しく変容して見えてしまう、という物語である。これまでマルクシストを自負していた彼は、自分の世界観がソヴィエト社会にそぐわないものと考え、懊悩する。その迷いを反映するように、彼が公園で出会った、「写真」の目で世界を見ている「色弱の男」は、彼の世界観は誤りであると責める。しかし、最終的にシュヴァーロフは自分の恋の世界観を選択し、「色弱の男」に勝利して終わる。

この、観念論とソヴィエト社会の唯物論という単純な二項対立図式に収められてしまいそうな作品の背後には、しかしながら、また別の問題がある。この作品における、世界をいかに見るべきか、という問題とその結末は、作家が世界をいかに描くべきか、という問題についてのオレーシャの考え方の鮮烈な表明なのである。オレーシャは、世界を変容させて見る主人公という人物像を『羨望』を含む『恋』以前の作品でも、そして以後の諸作品でも繰り返し描き続け、そのことを通して、ソヴィエト社会における自らの芸術の在り方を探ってきたのである。

『恋』が発表された1920年代末は、アヴァンギャルドによる「ファクトの文学」の提唱に端的に表れているように、文学において対象をいかに描くかということが、議論的になっていた時代であった。その問題に対し、プロレタリア系作家グループは19世紀リアリズムの描出方法を手本とするという答えを出した。また、アヴァンギャルドは「ファクトの文学」として、作家の主観によって対象を「歪曲」することを批判し、写真のように事物を「ありのまま」に描き出すことを目指した。そのような状況の中、同伴者作家であるオレーシャは、ヴォロンスキイの提唱した、19世紀を中心とする過去の文学の描出方法に依りつつ20世紀の芸術的実験の成果も取り入れるという「ネオリアリズム」の影響を受けながらも、独自の描出方法を実現した。それが、世界の視覚的変容だったのである。

『恋』は、世界を「写真」の目で見る「色弱の男」、すなわち「ファクトの文学」を対立項に置いた、描出方法に関するマニフェストなのである。

(こみや みちこ, 東京大学院生)

【A09】『悪霊』における仮面の問題

木寺 律子

ドストエフスキー (1821-81) の文学作品における「演技」の問題を考察することは発表者の長年の夢であり、どのようにしてこのテーマに取り組むことができるかを長期にわたって模索してきたのであるが、今年からようやくこのテーマでの研究を開始する。ミルチャ・エリアーデなどの宗教学の理論を援用することによってこの問題を考えることができるのではないかと仮説を立てている。

「演技」の問題とは、作品中のさまざまな登場人物が、その場の状況に合わせてさまざまな役割を演じて要領よく行動してしまうことや、自分の気持ちに正直になれずにいることを指している。登場人物のこのような演技は否定的なものであると理解する先行研究が多い。しかし、共同体の中において、また、他者との関係において一定の役割を演じることは単に否定的なことであるだけではないと発表者は考えている。この「演技」の問題のうちに、より豊かなものを見出していきたい。

今回の発表では、さまざまな作品のうち晩年の大作の一つである『悪霊』(1871-72) を扱う。『悪霊』では主人公ニコライ・スタヴローギンが、さまざまな人物に対して、その相手ごとに異なる思想を語るという一種の演技的な行動をとる。演技の問題は自己のみによって成り立つものではない。演技には他者の存在や他者の視線が不可欠であり、自己の強烈な自意識と他者の関係によって生じるものである。さらに演技の問題には、演技を可能とするための場が必要となる。『悪霊』にはバフチンの意味におけるカーニヴァルの要素が多くあるが、これは演技の問題と関わっている。

さらに、『悪霊』の語り手は、このようなスタヴローギンの顔や表情が「仮面」のようであると描写している。スタヴローギンの「仮面」のような顔は、スタヴローギンの不健全な精神状態を表すものとして否定的にとらえられることが多い。しかし、宗教学的には、仮面の着用とは本来の自己とは異なる他の人物になるための力を得ることであり、演技の問題と関連する興味深いものである。このような宗教学的な「仮面」の意義を考慮しつつ、スタヴローギンの「仮面」のような表情を彼のさまざまな他者に対する演技的な行動との関連で考える。

(きでら りつこ, 同志社大学)

【A10】トルストイとゾラの都市空間

覚張 シルビア

レフ・トルストイは、モスクワを「バビロン」と呼び、その作品において、都市を農村の対立項として否定的に描く。

フランスの自然主義作家ゾラは、都市の大量消費社会を描くが、そこでは、氾濫するモノの描写が大きな意味を持ってくる。彼のルーゴン・マッカール叢書は「第二帝政ブルジョワ社会告発の叙事詩」であり、「現代にも通じる人間世界の狂気と崩壊の叙事詩」である。そこで描かれるのは「産業機構の拡大に伴う人間の集団化」であり、それは「個人の矮小化」とも関係する。

トルストイとゾラのいずれにおいても、都市とそれに対置される農村とが描かれるが、両者の大きな違いは次のようなものであろう。トルストイが描写の中心に据えるのは、都市生活に違和感を覚える個人であり、ゾラが描き出すのは、肥大化する都市生活の方である。後者では、主人公でさえも、この都市空間に取り込まれ、あるいは適応不全によってそこから排除される歯車に過ぎない。ゾラにとって、都市とはいうまでもなくパリであるが、トルストイにとって、それはペテルブルグであり、時に、都市と農村の中間的位置を占めるモスクワである。これらの都市には、異化する主体としての「自然人」が登場する。シェーレル女官の夜会に姿を現すベズーホフや、オブロンスキーの役所に現れるレーヴィンがそうであり、『パリの胃袋』の主人公フロランと『ボヌール・デ・ダム百貨店』のドゥーニーズがこの役柄を担っている。トルストイは、都市を真の感情、偽りの感情という視点から比較するが、「感覚」の作家ゾラは、例えば「吐き気」のような感覚によって都市の異常さを示していく。フロランは、鉄骨とガラスでできた中央市場の「とてつもなく大きくて、しかも今にも壊れそうなこの幻影に怯え」ているが、これは都市空間において居場所を失う『アンナ・カレーニナ』の人物達と共通する要素である。しかし、トルストイの場合には、むしろ居場所以上のものを発見できる非都市的空間の描写の方がより重要となる。

本論の目的は、トルストイとゾラを比較することで、両者の作品において都市が象徴するもの、都市と非都市的空間の関係を明らかにすることである。

(かくばり しるびあ, 日本学術振興会特別研究員)

【A11】エイヘンバウム『私の年代記』考

中村 唯史

文学史的にはロシア・フォルマリズムの批評家と位置づけられることの多いボリス・エイヘンバウム(Борис Эйхенбаум, 1886–1959)の著作『私の年代記 Мой современник』は「文芸 Словесность」「学問 Наука」「批評 Критика」「雑録 Смесь」の4部から成り、各部にはそれぞれ祖父の評伝・自伝的文章・自作の詩、文学史についての論考、19世紀作家論、現代文学をめぐるエッセイが収録されている。発表済みのものも含む多様なジャンルの文章が雑誌の体裁を擬して配列されたこの本を、エイヘンバウムが1929年という時点で構想・刊行した意図は何だったのか。

エーリッヒ、エーニーほかの研究者は、当時の文学界における政治状況との直接的な関連を重視し、エイヘンバウムの意図がこの時期ラップ、「レフ」誌左派などから強まっていたフォルマリズム批判に対する抵抗と自己の立場の検証にあったと述べている。この見解はそれ自体として誤りではないが、本報告では、当初はフォルマリズム批判に対する戦闘的な論客としてふるまっていたエイヘンバウムに1920年代半ばから生じていた変化(「行為・伝記・個人への郷愁」)に着目して、『私の年代記』を彼の歴史観との関係において考察する。

ソ連の研究者チュダコヴァが強調しているように、エイヘンバウムの生涯を通しての関心事は文学史という以上に歴史と人間との関係だった。彼の初期の文学史的著作『若きトルストイ』(1922)、『レー尔蒙トフ』(1924)等は他のフォルマリストからも高く評価されたが、1920年代後半から顕著になった文学史を作家個人と彼を取り巻く具体的状況との相関の変遷として捉えようとするエイヘンバウムの新たな姿勢は、トゥニャーノフやシクロフスキーがめざした方法的な文学史モデルと対立するようになっていった。

本報告では、自分を含む過去と現代の作家の凝縮した列伝ともいべき『私の年代記』を、不可視の動態である歴史に内在する存在として人間を見ようとするエイヘンバウムによって行われた、自身の歴史観に基づく実践的な試みとして位置づけ、この書の構成や諸水準での表現技法の分析を通して、彼の歴史観も考察していく。

(なかむら ただし, 山形大学)

【A12】まなざしと声

—A.プラトーフにおける鏡像忌避とその周辺—

野中 進

かつて論者はアンドレイ・プラトーフ(1899–1951)の創作に見られる「鏡像忌避」とでも呼ぶべき傾向について論じたことがある。

* *НОНАКА Сусуму. Рассказ «Уля». Мотив отражения и зеркала // «Страна философов» Андрея Платонова: Проблемы творчества. Вып.5. Москва: ИМЛИ РАН. 2003. С.220–230.*

しかし、そのときの分析作業は不十分であった。新しい資料と新しいアプローチによってこの問題をあらためて論じることが、今回の報告の目的である。

扱う資料は、前出論文でも取り上げたプラトーフの短編「ウーリャ Уля」(執筆年不詳; 1940年代後半?)の他に、未完の長編『幸せなモスクワ Счастливая Москва』(執筆年 1932–36?)とそれに関連する創作ノート、独ソ戦中とその前後に書かれた戦争小説の一部、そしてこれまで論じられることの少なかったプラトーフの戯曲のうち、「父の声 Голос отца」(執筆年 1937–38; 初出 1967)である。

アプローチとしては精神分析、とくにラカンに依拠する。

本報告の課題は、プラトーフにおける「鏡像忌避」の現象をより正確に特徴づけることである。そのさい、次のような諸概念と結びつけることによって、「鏡像忌避」がプラトーフにとってどのように機能しているのかを明らかにしたい。すなわち、鏡像段階、寸断された身体、女性嫌悪、転移、自我のパラノイア的構造などの諸概念である。これらの概念の多くはラカンに発している。

われわれとしては、プラトーフの作品世界とラカンの諸概念があまりに重なり合うことにむしろ警戒しなければならないほどである。あるいは、なぜそうなるのか?という問いかけをしなければならない。

また、プラトーフの戯曲はプラトーフ研究者たちによってもっとも論じられることの少なかったジャンルである。「父の声」を以上のような枠組で分析することを通じて、彼の創作全体における戯曲の位置づけも試みたい。

(のなか すすむ, 埼玉大学)

【B01】 場所表現における誤り修正への取り組み

—実践と結果—

三浦 由香利

発表者は、先に自身の担当クラス (A 大学ロシア語専門課程 2007 年度生 38 名 1 年次第 1 期終了) を対象に、前置格の場所表現のどのような点を問題としているのかを調査し、特に顕著に現れた 2 つの項目 A. 「～(の) ところ) には…がある/ない」 B. 「場所」と「方向」について誤答の特徴を分析しその誤りの要因を探った。その後、これをもとに当該クラスで誤り修正のための見直し授業とたしかめを行い、さらに後期テストでも問題となっている項目について検討した。本発表はこれら一連の見直し授業とテストについての報告である。

1 年次第 1 期の調査 (I 期) では A. 「～(の) ところ) には…がある/ない」の文頭部分 (～(の) ところ) には前置詞 y を用いる誤りが最も多く、その要因として挙げられるのは次の 2 点—①この構文がくれば「y + 生格」という思いこみ②日本語表現とロシア語表現のずれ(「に」の影響)—である。また B. 「場所」と「方向」においては「場所」「方向」概念と対格及び前置格の関係が全く理解されていない誤りが見られ、その要因として①格助詞「に」の干渉②共起する動詞の機能に対する注意の不足③日本語に対する過度の依存と「場所」「方向」を表すロシア語の形式に対する理解が不十分であることが考えられる。このことから授業での提示方法として示唆されるのは、A. 「～(の) ところ) には…がある/ない」については 1) 文頭部分には様々な場所を表す状況語が導入されることを認識させ、2) 人ともに対する「場所」表現を確実に導入することであり、B. 「場所」と「方向」では 1) 最初の段階から「場所」「方向」の概念を明確に提示し、2) 日本語表現とのずれを把握させることである。

見直し授業 (II 期) はこれらの分析結果をもとに、誤りの訂正や文法指導に効果的であるとされる「学習者自身の気づき」「明示的な文法指導」「タスク」を念頭において、それぞれのテーマごとに 1. 文法事項の確認・再導入・練習、2. タスク、3. たしかめ という 3 段階からなる授業計画を立てて実践した。本発表では、II 期の授業の詳細と「たしかめ」の分析結果と特徴を明らかにし、I 期の結果と比較検討する。

また、この I 期、II 期の分析結果と後期テスト (III 期) の結果を個人別に比較することで A. B. 2 つの項目についての正用・誤用の変移を検討し、誤り修正への手がかりを探る。

(みうら ゆかり, 神戸市外国語大学)

【B02】 Использование материалов Звукового

корпуса русского языка в японской аудитории (на материале спонтанных монологов)

Шатохина Ганна

Одной из задач преподавателя русского языка как иностранного (РКИ) является формирование и дальнейшее развитие у учащихся навыков слухового восприятия русской звучащей речи. На занятиях данные навыки формируются и закрепляются при помощи заданий на аудирование.

Преподаватели РКИ не должны забывать, что аудирование должно быть постоянным элементом урока.

Введение материалов нового типа — текстов живой речи, записанных от носителей русского языка в полевых (естественных) условиях, — дает возможность в иностранной учебной аудитории преподавать не только традиционную (языковую), но и речевую фонетику.

Звуковой корпус, поставляющий свои материалы в Национальный корпус русского языка, уже сейчас является базой для учебных материалов нового типа, предназначенных для использования в иностранной аудитории.

В настоящем докладе предлагается несколько вариантов работы с аудиоматериалами, в которых информанты рассказывают о том, как они проводят свободное время.

Данная методика прошла апробацию в Лингвистическом институте МИД Японии в группах стажеров, на продвинутом этапе обучения, при подготовке к языковой практике на территории Российской Федерации.

(東 (ひがし) シャトヒナ・ガンナ, 外務省研修所)

【B03】 Специфика технологии

подготовительного обучения грамоте
билингвальных детей в Японии

Сивакова Стелла

Данный доклад посвящен авторской технологии практикума «Билингва Класс» по подготовительному обучению русской грамоте детей-билингвов в Японии. Наша программа рассчитана на 6 месяцев и состоит из трех этапов. При ее разработке мы опирались на: 1) теорию деятельностного подхода при формировании умственных действий (П.Я.Гальперин, В.В. Давыдов, Д.Б.Эльконин и др. Россия); 2) материалы учебно-методического пособия для двуязычного детского сада «Русский язык для дошкольников» и пособия «Многоязычие в детском возрасте» (Е.Ю.Протасова, Н.М.Родина. Финляндия); 3) педагогическое пособие «Наши трехязычные дети. Русский язык вне России» (Е. Мадден. Германия); 4) учебные материалы «Русский учебник» (А.Кучерский. Израиль); 5) учебно-игровые задания в 4-х книгах «Звуки речи, слова, предложения — что это?» (Р.Д.Тригер, Е.В. Владимировна. Россия).

Двухлетний практический опыт преподавания в школе Билингва Класс позволил сделать вывод о том, что для успешного овладения русской грамотой и выработки многих разговорных и орфографических навыков у детей-билингвов необходимо в первую очередь развитие фонетико-фонематического слуха и звукового анализа. Соблюдение правильного ударения, твердости и мягкости согласных в произносимых словах определяются в основном развитием речевого слуха. Русскую орфографию часто называют фонематической: огромное количество орфограмм в ней связано с необходимостью соотносить букву с фонемой в сильной позиции (безударные, парные звонкие и глухие согласные в корне слова, правописание приставок и окончаний существительных, глаголов, прилагательных и т.д.). Недоразвитие фонематического слуха, ограниченность и своеобразие словарного запаса, особенности словообразования и понимания незнакомых русских слов, трудности в употреблении некоторых грамматических форм свидетельствуют о том, что без специальной многоаспектной коррекционной работы по развитию фонематического слуха изучение детьми-билингвами практически всех разделов грамматики и орфографии русского языка затруднено. Состояние речевого развития, уровень сформированности их звукового анализа и синтеза в конечном счете обусловили в нашей школе и собственные технологии, и собственное содержание подготовительной программы по обучению русскому языку для детей-билингвов. Грамматико-орфографическая пропедевтика, как и развитие словарного запаса у наших детей, — не являются для учителей задачей целых уроков, но постоянно сопутствуют основному содержанию программы школы Билингва Класс на этом базовом этапе обучения.

(シヴァコーヴァ・ステラ, 創価大学)

【B04】 数量性の機能意味的カテゴリー

—意味と形態による言語構造—

鈴木 理奈

機能的文法学において機能意味的分野は、ある一つの意味とそれを表す異なるレベルの言語手段の総体を組織的に示す二元一体的な言語構造を形成し、“意味と形態”という相互関係の原則を理論的に根拠付けるものとされるが、これを元に構成する機能意味的カテゴリーの数量性に関しては、まだ多くの研究要素が残されている。

本研究では、文中の名詞と意味のおよび統語的關係を持つ従属的な語彙単位とされる固有の前置詞と同様の機能をはたす等価物の、とりわけ数量名詞によって形成される前置詞相関項を考察の対象とするが、これは、*башня высотой сорок метров* 等のように、数量名詞、数詞、数量単位を基本の構成要素として、文中で一貫とした構造を持つ統語素を形成するものである。文法学的視点による考察において、前置詞的単位である数量名詞語形 *длинной, с крепостью* 等は、単独あるいは従属的成分 *до, около, более* 等を伴い語形一覧を作ることが確認できる。

意味論的視点から見た場合、これらの数量名詞語形は“数”と“量”という概念による数量カテゴリーに属し、それを土台として成り立つ機能意味的数量分野においても、数量表現手段の一つとして、その一部分を成すことは明らかである。数量性のマクロ分野は、それぞれの核を持ついくつかのミクロ分野を包含する多中心的な性質であるが、本研究の分析対象である数量名詞語形はその形態構造から、定語的数量性質のカテゴリーを成すことが認められる。この定語的性質の数量名詞語形の構成要素は単に集合的ではなく、組織的に一定の体系を構築し、意味的分類システムでいくつかのグループに分けられ、その各々は同義的パリエーションの形を持ちながら、オポジションを形成するのである。この数量カテゴリーにおける、意味的システム体系の概略的理解を、組織図をもとに提示したい。

(すずき りな, 札幌医科大学)

【B05】ロシア語と日本語のアスペクト体系における「限界」意味概念の広がり

金子 百合子

アスペクトの意味野において「限界」という概念が重要であることは言うまでもないが、個別言語の性格によって、どのようなアスペクト的意味が前面に押し出されるかという点は大きく異なる。

本発表の目的は対照言語学的な視点から、ロシア語と日本語の動詞アスペクト体系における「限界」の性格について検討することにある。

ロシア語の動詞ペアにおいては少なくとも次のような「限界」の諸バリエントを見出すことができる。

1. *вставить – встать, выкапывать – выкопать* のような、部分的な結果が漸次的に蓄積されていく漸次的限界と行為が継続不可能な事態を迎えた直後に終了する絶対的限界のペア。漸次的限界は事態の自然な展開よりある一定の結果が予見されるといった意味で予見的限界と名付けられることもある。
2. *находить – найти, вспыхивать – вспыхнуть* の体ペアにみられるような、先行する過程において部分的な結果蓄積がなく、行為の結果は瞬間的とみなされる瞬間的限界。
3. *поступать – поступить в университет, сдавать – сдать экзамен* 等の体ペアにみられるのは、動詞行為の限界＝行為の目的であり、その限界到達は過程の進行によって決定するのではなく、別の外的要因による非予見的限界。
4. *улучшаться – улучшиться* のように、限界到達が相対的なものであり、限界到達後であってもさらなる過程継続が可能であるような相対的限界。
5. *благодарить – поблагодарить, просить – попросить* 等、発話内行為を表す一連の動詞における限界は陳述の伝達目的と同一であり、話者がその伝達目的を果たしたとみなした時点で行為は終了する。仮に、伝達の限界と名付けることができるようなもの。

本発表では、マスロフとホロドヴィチによる限界性の解釈に触れながら、上述した「限界」の諸バリエントを対象言語間で比較検討する。当該の意味概念のロシア語の動詞アスペクト体系における優勢さと、日本語のそれにおける相対的な“弱さ”ならびにそれらに取って代わる意味特徴を明らかにする。

(かねこ ゆりこ, 岩手大学)

【B06】 На перекрестке лингвистики и идеологии: И.А.Бодуэн де Куртенэ о международном вспомогательном языке

Гречко Валерий Михайлович

Сфера деятельности и творческое наследие Бодуэна де Куртенэ необычайно разнообразны. Будучи выдающимся лингвистом, Бодуэн никогда не ограничивался лишь чисто научной деятельностью и принимал активное участие в общественно-политических дискуссиях того времени. Характерным для Бодуэна является то, что две основные сферы его деятельности — научная и общественная — не были полностью изолированы друг от друга, а органически переплетались. Демократические взгляды Бодуэна непосредственно проявляются и в его учении о языковых изменениях, и в диалектологических исследованиях, и в его внимании к вопросам языкового планирования — в тех областях, которые делают его одним из предтеч современной социолингвистики.

Данный доклад посвящен рассмотрению вопроса, в котором научная и общественно-политическая деятельность Бодуэна оказываются особенно тесно связаны, а именно вопроса о международном вспомогательном языке. В своих трудах Бодуэн подверг тщательному анализу как саму идею создания международного языка, так и ее конкретные воплощения, в особенности язык эсперанто. Сегодня он по праву рассматривается как один из основателей интерлингвистики — области лингвистики, занимающейся изучением искусственно созданных языков.

Бодуэн был одним из немногих лингвистов, однозначно поддержавших идею создания международного языка. Эта поддержка была органически обусловлена как его лингвистическими взглядами, так и идеологической позицией ученого. В докладе анализируются основные положения лингвистической концепции Бодуэна, повлиявшие на его положительную оценку идеи создания международного вспомогательного языка. Кроме того, выделяются те черты мировоззрения ученого, которые находятся в непосредственной связи с его позицией по этому вопросу.

(グレチコ・ヴァレリー, 東京大学)

【B07】『エヴゲーニイ・オネーギン』エスペラント

訳の特徴と意義

佐々木 照央

プーシキンの代表作『エヴゲーニイ・オネーギン』のエスペラント語訳は、今のところ知られる限りで6種類ある。私が参照したそのうちの3点をとりあげ、エスペラント語訳の優れた点を紹介する。

- 1) A.S.Puškin, *Eŭgeno Onegin*. Roman en versoj. El la rusa lingvo tradukis kaj komentis N.V. Nekrasov. Paris–Leipzig–Moskva, Sennacieca Asocio Tutmonda, 1931. 236 pp.
- 2) Aleksandr Puškin, *Eŭgeno Onegin*. Tradukis el la rusa lingvo Valentin Melnikov. Kaliningrad, 2005, Sezonoj, 256 pp.
- 3) Sergej Rublov (trad.) *A.S.Puškin*. Jaroslavl, 2002, Remder.

エスペラント語に訳された場合、これがどの国の文化的伝統にも根ざさない言語への翻訳と見なされ、無視される危険性がある。英語、日本語、フランス語、ドイツ語等々、既存の国語への翻訳ならば、ロシア語の文化を他の土着の文化の土壌の上に移植する、という意味があるが、人工語への翻訳にはそのような意味はありえないだろう、と思われがちである。しかしながらエスペラント語ならではの意義がある。一例をあげると、『エヴゲーニイ・オネーギン』の冒頭のエピグラフはフランス語で書かれているが、その中の「vanité」という単語の訳の問題がある。ロシア語の訳はおおむね「тщеславие」となっており、日本語訳も多くは「虚栄」となっている。しかし、このフランス語の単語は聖書の伝道の手紙では「空の空なり」という文脈で用いられているものである。現代フランス語では「虚栄」という意味が普通の解釈であろうが、古典的には「空」という重要な意味があった。ロシア語訳聖書ではこの部分は「cyera」である。しかし、これは現代的意味では「せわしなさ」などが主であり「空」とかなりかけ離れている。エスペラント語訳ではこれら「vanité」「cyera」ともに「vanto」およびその派生語「vanteco」「vantaĵo」などで表現される。エスペラント語は単語の多くがラテン語起源であるためにかえて古典的な意義を伝達することができるのである。

(ささき てるひろ、埼玉大学)

【C01】日露戦争に至る道

—露日対立原因としての日清戦争—

有泉 和子

明治時代半ば過ぎに行われた日清戦争は、歴史学辞典的に一番簡潔に定義すれば、「1894–95(明治27–28)年、主として朝鮮の支配をめぐる日清間に行われた戦争」となる。

研究史的には、第二次世界大戦前、日朝清の国際関係の側面から実証的に研究した田保橋潔を皮切りに、対朝鮮貿易の観点から論じた田中康夫、政財界の朝鮮市場獲得要求や軍部と外務省の外交二重性を論じた信夫清三郎、明治初年以來の対朝鮮・中国政策として論ずる長塚明、朝鮮支配と列強の抗争、民衆の抗日闘争と抑圧の視点から論ずる藤村道生がいる。

その後の世代では、政治外交史の立場から論じた高橋秀直等、当時の国際情勢の判断と近代資本主義経済の成立・発展の中では、やむおえないぎりぎりの選択による対外戦争という重大さからも、戦後歴史学界での研究層は厚く、また、現在は戦場にされた朝鮮民衆の立場から論ずる、日韓双方の研究が華やかである。

今回、報告者は、やや視点を変え、この日清戦争を、その十年後に続く、日露戦争を直接必然的に導くものという観点から論ずる。

日本は、朝鮮に威圧を加え、清国と戦い、欧米列強の動向と調停工作に十分気を配ることは勿論ながらも、実は常に、その朝鮮の向こう側、同国を属国とみなす清国をも通り越し、ロシアを注視しており、ロシアもまた日本に対する充分なる監視を怠っていない。

一方、朝鮮もまた、戦前・戦後を通じ、ひそかにロシア接近を図る。

まさにこの日清戦争の「朝鮮支配を巡る争い」という前提と結果が、直接日露間の対立激化の原因となり、両国とも朝鮮内政への積極的介入を押し進め、事態は複雑化し、ロシア海軍の京城入京と朝鮮国王のロシア公使館移駐、日本による還御勸告、奪還、そして、やがては、両国の直接軍事衝突へと発展する。

ピョートル大帝治世下の十八世紀初め、日本の年代で言えば、江戸時代から、朝鮮半島と日本海をはさみ、お互いに注目しあっていた国同士、両国とも軍部、外務省という、立場の異なる組織、および、その構成員が、互いに、それぞれの立場から、日清戦争を直接契機に、後に続く日露戦争への道を牽引して行くさまを考えて行く。

論拠には、『日本外交文書』、『日韓外交史料』、イギリス外務省文書、ロシア海軍文書館文書等を使用する。

(ありいずみ かずこ、東京大学史料編纂所)

【C02】二葉亭四迷の新発見露文書簡

沢田 和彦

ロシアで二葉亭四迷, 本名・長谷川辰之助の露文書簡が見つかった。発見者は G.I.ドゥダレツ女史で, 女史はサハリン州国立文書館館長を永年つとめ, 現在はペテルブルグ在住の文書専門家である。女史はモスクワのロシア連邦国立文書館(GARF)でこれらの書簡を発見した。内訳は, N.K.ラッセル宛が 1 通 (1906 年 1 月 24 日付), B.D.オルジフ宛が 4 通 (うち 1 通は葉書, 1907 年 2 月 2 日より 10 月まで), そして二葉亭の名刺 1 枚である。

ラッセル (1850-1930), 本名スヂロフスキイはアメリカに亡命し, ハワイに居住していたポーランド系ロシア人の元ナロードニキである。彼は 1904-05 年の日露戦争のロシア人・ポーランド人俘虜に革命思想を鼓吹する目的で, 社会革命党(エス・エル)系の「アメリカ・ロシア自由友の会」から派遣されて, 1905 年 5 月 30 日に来日し, 7 月 5 日に神戸に移った。神戸では露文週刊紙『日本とロシア(ヤポーニヤ・イ・ロシーヤ)』が発行されていた。これはロシア人・ポーランド人俘虜の慰安のために日本人正教徒が出し始めたものだが, 第 7 号からラッセルが編集権を握り, 革命思想を鼓吹する内容に変えていった。翌年 1 月 31 日にラッセルは長崎へ赴き, かの地で同志を集めて活動した。

二葉亭にラッセルのことを知らせたのは, ピウスツキだろう。プロニスワフ・ピウスツキ (1866-1918) はポーランド人の民族学者で, 初代ポーランド国家首席ユゼフ・ピウスツキの兄にあたる。プロニスワフは 1905 年末から約 7 カ月間日本に滞在し, 二葉亭や, その親友のジャーナリスト横山源之助をはじめ, 日本の社会主義者, 民族学者, 女流音楽家, ロシア人革命家, 中国人革命家らと親交を結んだ。

ユダヤ人のオルジフ (1864-1934 以降) は, 1886 年に「人民の意志」党を再建しようとして逮捕, シュリッセルブルグ要塞監獄に入れられた。1898 年にウラジオストクに流刑となり, 1905 年 10 月のかの地の反乱に加わった。彼は 1906 年 4 月頃来日し, 東京で二葉亭とも会っている。同月 27 日から長崎でロシア語の政治・社会・文学新聞『ヴォーリャ』(自由) が出始めた。当初は V.K.ヴァデーツキイが編集発行人をつとめたが, 5 月 17 日の第 11 号からオルジフに替わった。

二葉亭の書簡のロシア語は文法的にはほぼ非の打ちどころがなく, 筆記体の筆蹟も実に自然で巧みで, 日本人の手になるとは思えない。本年は二葉亭の没後 100 周年にあたり, この機会にこれらの書簡を紹介したい。

(さわだ かずひこ, 埼玉大学)

【C03】オブローモフ主義におけるメランコリーの歴史社会学的意義について 坂中 紀夫

ニコライ・ドブロリューボフの論考におけるオブローモフ主義の「怠惰と無気力」を, メランコリーと社会の歴史的問題として考察する。結果としてそれは, オブローモフ主義にロシアのナショナルな意味が付されることの, 論理的構図を確認するものとなる。

ドブロリューボフによれば, オブローモフ主義者の「怠惰と無気力」は思想と政治との社会的所産である。それは第一次的には貴族身分に属することが可能にする, 働くことの負担免除に由来する行為抑制である。しかし, 貴族であることは, その必要条件ではあっても, 十分条件ではない。それには, 彼等を単なる無為ではなく, 行為の抑制へと向かわせる契機が前提となるからだ。行為への志向性を備給するのは, 自由主義的な理想である。しかし, この志向性は挫かれてしまう。その実現を, ロシアの政治状況が恒常的な困難におくからだ。このことは, そうした理想の受容者が常に感情的な自己否定性を抱えざるをえないことを意味する。そこで「怠惰と無気力」が, この状態に対するいわば防衛機制として案出されるのである。ここに, 一旦は喚起された行為の抑制が生じる。思想と政治との齟齬に由来するこの観照的な態度は, 社会的なメランコリーと呼ぶことができるだろう。

こうした社会的なメランコリーを, ドブロリューボフは歴史性においても捉えている。たとえば, オブローモフ主義者のメランコリーに対する社会的評価の世代ごとの変容が言及される。理想に関連して何もできない・しないことが, 昔は容認されていたのが, 今では消極的にも許容されなくなった, との指摘である。この変容は, 理想からの疎外が, 積極的な実践形式によってその解消についての想定が可能な状況として社会的に認知されるようになったことに相関した効果である。その結果, 行為抑制は, 個人的な心理の問題であると同時に, 規範的判断が否定的な言及を与える社会的な適応様式としての性格を強める。このことは, 先の社会的なメランコリーが苦痛として体験される蓋然性が高まることを意味している。

苦痛は充足の阻害であるので, その原因についての反省を促す。その原因は, ロシアの政治状況である。つまり, 苦痛がロシア的として特性化されるのだ。当報告はこの点に, オブローモフ主義にロシアのナショナルな意味が付されることの, 論理的構図を指摘する。以上の概観は, 具体的な文学作品への参照をまじえ, 進められる。

(さかなか のりお, 神戸市外国語大学院生)

【C04】ロクチェフ『わが回想』にみる新疆のペンテコステ派の体制選択

塚田 力

本発表ではペンテコステ派の信徒であるゲオルギー・ロクチェフ(Георгий Иванович Локтев 1902–98)の自伝『わが回想 Мои Воспоминания』を紹介し、現在の中国の新疆ウイグル自治区におけるペンテコステ派の展開とその思想について対権力関係と体制選択の問題を中心に考察したい。

ペンテコステ派とはキリスト教のプロテスタント教会のうち、20世紀初頭にアメリカで始まったペンテコステ運動から誕生した教団、教派の総称である。ロシア帝国域内では1910年ごろから活発な布教が開始され、その後も現在に至るまで信徒を増やしつつある。

彼らの一部は1930年頃から農業集団化を逃れて中国の新疆ウイグル自治区に亡命し、伊寧市及びその近郊のいくつかの農村に入植した。1931年には独自の教会組織を創設した。1938年に彼らは2派に分裂したものの、ロシア系住民の中での布教は順調に進み、1958年の統計によればその信徒は530人にまで増加した。1965年までに大半の信徒はオーストラリアへと出国した。現在も伊寧市内に少数の信徒が生活しており、ロシア人墓地の管理は彼らに委ねられている。

ロクチェフは、1902年にウラリスカヤ州のロシア正教の古儀式派の一派であるペロクリニツキー派の信仰を持つコサックの家庭に生まれ、1920年代にペンテコステ派の信仰を受け入れた。

1932年、ソビエト連邦から新疆へと出国し、特に1938年以降はペンテコステ派教会の多数派のリーダーとして積極的な宗教活動を行っていた。

新中国成立後、ロシア系住民の間で出国の機運が高まる中、許可されていなかった西側諸国への出国を呼びかけるなどした罪で中国当局によって投獄されたが、1965年に当局の許可を得た上でオーストラリアへ出国した。

新疆という環境の中で彼がどのようなアイデンティティを持ち、西側諸国や中国、ソビエト連邦の体制をどう位置付けていたか、そして彼らはなぜ西側への出国を選択したかを論考する。

(つかだ つとむ、北海道大学院生)

ワークショップ

【D-a】生誕200周年記念 ゴーゴリ文学への問いかけ

【趣旨】生誕から200年を経て、ゴーゴリの文学は現代の文芸界にもアクチュアルな議論を生み続けている。

ロマンチズムからポストモダニズムへの過程のどこに彼の創作を位置づけるべきか？ ウクライナ風、ペテルブルグ風、ローマ風といった複数の風土的要素はいかに相互に関連しているか？ 彼の特異な視覚や身体意識は現代文化の言葉でどのように語ることができるか？ その信仰や政治・倫理的イデオロギーは、帝国論のコンテキストでどのように説明されるのか？

ゴーゴリをめぐるこの種の問いは、ポスト・ソ連社会のアイデンティティの問題を反映しているだけでなく、近代ロシア文学の輪郭そのものにかかわる重要性を秘めている。本ワークショップは、このような議論の経緯を踏まえながら、今どのようなゴーゴリへの問いかけが有効であり、かつ生産的であるのかを、日本の場で考えてみることを目的とする。

司会者：浦雅春（東京大学）

討論者：野中進（埼玉大学）

ゴーゴリにおける危機意識

秦野一宏（海上保安大学校）

『死せる魂』に取り組みはじめたゴーゴリの現実に対する認識は大きく変化するが、それはなぜなのか。彼は<現代世界>の変質をどのように捉え、またその<世界>をどのように変革しようとしていたのか。このような問いかけを背景に、『肖像画』『タラス・ブーリバ』の改作の意図、『死せる魂』第2部の「再教育」のテーマ、あるいは『友人との往復書簡抜萃』に示された西歐的「知性」への批判などの問題を再検討し、ゴーゴリの描いた<現代>と<未来>の世界像を考察したい。

『アラベスキ』に見るゴーゴリの「鏡」の詩学

安達大輔（日本学術振興会特別研究員）

『肖像画（初版）』『ネフスキ大通り』『狂人日記』といった中篇で知られるゴーゴリの文集『アラベスキ』は、一方で、芸術論、歴史・地理の教育法、歴史叙述等々多様なジャンルの散文から成り立っており、テキストとしてのまとまりが見えにくい。そのため『アラベスキ』に統一性を見出そうとする試みがしばしばなされてきたが、それらは内容／形式の面にテキストを切り分け、いずれかを捨象してしまいがちである。

本発表では、ゴーゴリが別の箇所を立てている「描写すること／反映すること」という区別を手がかりに、描写、すなわち対象の再現＝表象とは別の言語、「反映＝鏡」によって構成されたテキストとして『アラベスキ』を読んでみたい。

亡命の第一波とゴーゴリ 諫早勇一 (同志社大学)

革命と内戦の後にロシアを後にした第一波の亡命者たちにとって、プーシキン、ドストエフスキーに比べるとゴーゴリの位置は高くない。しかし、彼らの中にはチジェフスキー、ミルスキー、ゼンコフスキーら、ゴーゴリについてすぐれた論考を残した批評家たちもいた。ここでは、そうした批評家たちの論考を今日的視点から概観した後、第一波の若い世代を代表する作家ナボコフとゴーゴリとのかかわりについて、ナボコフの創作も視野に収めながら再考していきたい。

ソ連後のロシア文学におけるゴーゴリ・イメージ

望月哲男 (北海道大学)

1980 年代以降、主として 90 年代のロシア作家が創作の中に取り込み、展開したゴーゴリ文学の諸要素について、いくつかの例を挙げて検討する。

ロシア文学の中に生きているゴーゴリ的な発想やゴーゴリ的问题へのこだわりの、現代における諸相が瞥見されると同時に、90 年代前半から後半への文学スタイルや雰囲気の変化も観察される。話題となる主な作家は、アナトーリー・コロリョーフ、オレグ・エルマコーフ、アンドレイ・ビートフ、アレクサンドル・ソルジェニーツィン、ワシーリー・アクショーフ、ドミートリー・リプスケロフ、ニーナ・サドゥールなど。

【D-β】新しい初修外国語カリキュラムとロシア語教育

【趣旨】近年、初修外国語教育は新カリキュラムの導入によって大きく変貌をとげようとしている。新潟大学で推進されている特色 GP「総合大学における外国語教育の新しいモデル～初修外国語カリキュラムの多様化と学士課程一貫教育システムの構築」はロシア語教育の領域でも独自の成果をあげているほか、北海道大では CALL オンライン授業を導入した新しい初修外国語カリキュラムの展開が始まっている。また、副専攻制度やオーナーズ制度を導入し初修外国語教育の充実をはかっている大学もある。本ワークショップではこうした新しい教育システムを導入した各大学のロシア語教育の理念と実践例について報告し、新カリキュラム導入の背景にある外国語教育の多様化、効率化、

評価システムの確立等の諸問題について議論する。

司会：齊藤陽一 (新潟大学)

新潟大学の初修外国語特色 GP 番場俊 (新潟大学)

グローバル化が進み、英語教育の必要性が声高に語られる一方で、英語以外の外国語に対するニーズが多様化している。初修外国語を学修する意義が自明ではなくなった今日、大学は、学士課程教育における初修外国語の位置づけを再定義する必要に迫られている。

本発表では、全学一律の必修を廃し、「コース選択性」と「4 年一貫教育」を柱とするカリキュラム改正をおこなって、平成 19 年度文部科学省特色 GP に選定された新潟大学の取組を紹介する。

CALL 授業を導入した初修外国語新カリキュラム

宇佐見森吉 (北海道大学)

北海道大学ではこれまで全学教育科目の英語で初年次学生 2,500 人以上を対象に CALL 授業を行ってきたが、平成 20 年度秋からは初修外国語でも同規模の CALL 授業を開始した。初修外国語科目に CALL 授業を導入した経緯、初修外国語における CALL 授業の目標、北大で使用する CALL システムの特徴、教材作成、授業運営、評価方法等の特色、新カリキュラムの特質、学生に対するアンケート調査の結果等について、初年度のロシア語授業を例で紹介する。

教養教育における第 2 外国語 西中村浩 (東京大学)

現在のグローバル化の進展のなかで、教養教育においては世界的な視野と地域に密着したリージョナルな視野を併せ持った学生の育成が重要な課題となっており、それにともない、英語だけではなく、多様な外国語の教育をいかに充実させるかが大きな問題となっている。東京大学では平成 18 年度に外国語を含む前期課程カリキュラム改訂が行われたが、本発表では東京大学教養学部において改訂以降になされた第 2 外国語教育のいくつかの試みについて紹介する。

ポスターセッション

【E-a】ロシア語初学者用語彙データベースの制作と運用

小林潔, 尾子洋一郎, 堤正典 (神奈川大学)

【デモおよび見学者への解説】

初修ロシア語学習(授業)において学習者はロシア文字を習得しなければならないが, 現実には授業時間の都合で文字学習に多くを割くことができない。初学者はロシア文字と単語の同時学習を強いられ, 特に非専攻語課程では授業についてこられず学習意欲低下や学習困難につながることもある。

しかしそもそも文字は語を表記するもので, 単語を効率よく学習できれば自ずと文字も身につく。効率的な語彙習得のための教材が求められる所以である。そこで一つの試みとして, 初学者用の語彙データベースを作成し, 別に用意した提示ソフトと連携させて学習者に必要な語彙情報を与えることを提案する。

語彙は報告者が実際の授業で用いている教科書から選定する。それらの語彙に関して文字情報(綴り)・音声情報(発音)・語義(日本語訳)を含んだ語彙データベースを作成する。なお, このデータベースはあくまでも現場での教育効果を狙ったもので, 汎用的な教育基礎語彙の提案ではない。ただし補完は可能であり, 将来的には語彙選択についても検討し, 単語の用法も追加していく。

授業時には学習すべき語彙を提示ソフトにより視覚的かつ聴覚的に提示する。これにより文字と語彙の同時習得を支援する。

これらデータベースと提示ソフトは, 普及して(あるいは無料で)直感的操作が可能なものとし, 各教員のニーズとスキルと好みに応じたものを使用する。これにより各教員の教案に応じた種々の提示方法が可能となる。フラッシュカードとして使うのはもちろん, 単語テストの作成や聴解試験での利用もできる。またLMS(学習管理・授業支援システム)に掲載すれば自学自習にも有効である。

他の言語の教育では既にこのようなシステムは存在し, ロシア語教育でも音声付き単語リストといった形で提供されている。しかし, 前者はデータベースと提示ソフトが一体化した場合が多く, 後者の単語リストでは教場でそのまま利用するのに困難がある。データベースと提示ソフトを分離させることで, 教員は好みのソフトを用いることが可能となり, 非専攻語の教育現場に適した小回りの良さが実現する。

学習時の未知の単語の存在は学習者にストレスを感じさせる。確実な語彙の定着により学習者の意欲低下を防ぎ, モチベーションを維持させ, 授業への参与を深めることができる。教師にとっては単語学習のための時間が節約され密度の濃い授業展開が可能になる。

以上の研究報告要旨は著者に無断で引用はできない。
Not for quotation without the author's agreement.

日本ロシア文学会活動記録(2008~2009)

1. 2008年度(第58回)定例総会・研究発表会

第58回定例総会・研究発表会は2008年10月11日(土), 12日(日)の両日, 中京大学名古屋キャンパスで開催された。

10月11日(土)

午前 開会式, 研究発表会

午後 各支部総会, 理事会, 藤沼貴氏講演会, ワークショップ, 定例総会

10月12日(日)

午前 研究発表会

午後 各種委員会

また, 10月12日15時より名古屋学院大学にて,

ロシア文学会, ロシア史研究会, ロシア・東欧学会, 日本スラブ東欧学会による共同シンポジウム「ロシア・東欧の歴史と現在」及び懇親会が開催された。

2. 研究発表会内容

第1会場: 521教室

・第1ブロック: 10月11日(土)午前〔司会〕浅岡宣彦, 中村唯史, 大西郁夫

赤尾光春: ワシーリー・グロスマンとデル・ニステルーソ連「ホロコースト文学」の起源

秋草俊一郎: 謎解きナボコフ『ディフェンス』—モラル・ゲームとして

岩本和久：ヴィクトル・ペレーヴィンと『収容所群島』

榎本真奈美：ツヴェターエワ『私のプーシキン』における絵画と色彩

・第4ブロック：10月12日（日）午前〔司会〕楯岡求美，杉本一直，長谷川章

古宮路子：オレーシャの散文と映画

中野幸男：亡命者の過去への返答—シニャフスキー『おやすみなさい』における作者の自己表象

宮風耕治：ユーリイ・トゥィニャーノフのSF論

宮本宗実：われらが“壁の向こう”で見たものは？—有理数と無理数

第2会場：522教室

・第2ブロック：10月11日（土）午前〔司会〕松本賢一，柿沼伸明

木寺律子：劇詩『大審問官』と共同体の問題

久野康彦：イヴァン・ツルゲーネフ『まぼろし』論
越野剛：ドストエフスキー『悪霊』におけるコレラのイメージ

榎内裕子：芥川龍之介とツルゲーネフ—「山鳴」をめぐる芥川の読書経験から

・第5ブロック：10月12日（日）午前〔司会〕木村崇，久保英雄，大須賀史和，源貴志

有泉和子：ロシア人の見た日本—シュバンベルグ探検隊の日本北辺航海

坂中紀夫：1830-40年代の教育システムにおける新しい関心—C.ウヴァーロフと「ナロードノスチ」

塚田力：古儀式派スキンヘッド—ニコライ・コロリョフの『スキンヘッドバイブル・新約』について

一柳富美子：《エヴゲーニイ・オネーギン》プーシキンからチャイコフスキーへ—原詩の音楽的処理を探る

見附陽介：M.M.バフチンの対話理論における人格とモノの概念—C.Л.フランクとの比較から

第3会場：541教室

・第3ブロック：10月11日（土）午前〔司会〕金田一真澄，小林潔，古賀義頭

浦井康男：カラムジン『ロシア人旅行者の手紙』におけるテキスト・バリエーションの分析

エフィーモワ・ゾーヤ：話し言葉の語りにおける談話標識—ロシア語と日本語の対照研究

G. Шатохина. Описание косвенной фонетической межъязыковой интерференции на материале рeaализации японскими учащимися русских бифонемных консонансов

・第6ブロック：10月12日（日）午前〔司会〕林田理恵，北岡千夏，金子百合子，柳町裕子
佐藤規祥：自動詞と造格に立つ語との関係
鈴木理奈：ロシア語の前置詞と前置詞等価物—数量名詞語形を中心に

Ю. Ключков. Значение упражнений для предупреждения и устранения грамматических ошибок японских учащихся в структуре практического занятия по русскому языку

C. Сивакова. Русский язык для детей-билингвов и детей-мигрантов в Японии
鈴木淳一，高橋健一郎，田村愛火，ジダーノフ・ヴラデーミル：Своеобразие современной русской речи на примере использования логоэпистем

ワークショップ：10月11日（土）午後

D-α 第1会場：521教室

ロシア文学にとって翻訳とは何か？—理論・実践・受容〔司会〕望月哲男，〔報告〕木村崇，沼野充義，吉岡ゆき，〔コメンテーター〕柴田元幸

D-β 第2会場：522教室

チャストゥーシカの複合的研究に向けて—コストロマ州ネレフタ地区の採録資料を題材に〔報告〕伊東一郎，熊野谷葉子，柚木かおり

3. 総会議事要旨

（議長：岩浅武久，国松夏紀，黒岩幸子）

(1)第5回日本ロシア文学会学会賞表彰

井桁会長より高橋沙奈美氏と水野晶子氏に表彰状が授与された。

(2)会務報告

事務局より会員異動について報告があり，ついで新入会員の紹介が行なわれた。

(3)2007/2008年度決算・2008/2009年度予算案

事務局より決算と予算案が報告され，承認された。（24-25ページを参照）

(4)会誌規定（改正案）

会誌別冊に関する規定の改正案が提案され，了承された。

(5)研究発表会の運営に関する内規（案）および会則（改正案）

次年度以降の総会・研究発表会について，組織委員会と実行委員会の立ち上げに必要な内規と会則の改正案が提案され，ともに了承された。

(6)日本ロシア文学会倫理綱領（案）

倫理綱領第一次案について，資料に基づき趣旨説

明がなされた。

(7)2009 年度総会・研究発表会

来年度の総会・研究発表会は、筑波大学で 2009 年 10 月 24 日 (土)、25 日 (日) に開催されることが報告・承認された。

4. 会員異動並びに維持会費納入者 (敬称略)

会員異動 (2008 年 9 月～2009 年 7 月)

入会者 (受付順)

富田マルガリータ (関東)、木下裕子 (北海道)、小林久子 (関東)、秋月準也 (北海道)、鳥山頼子

(中部)、Chen Yin-Yin (海外)、梶山祐治 (関東)、堀口大樹 (関東)、奥彩子 (関西)

退会者

渡邊武 (北海道)、内村剛介 (関東)、尾松亮 (関東)、栗生澤猛夫 (北海道)、高野雅之 (関東)、久保英雄 (中部)、橋本弘樹 (中部)、小野理子 (関西)、角田耕治 (関東)

維持会費納入者

天野和男、垣内智夫、亀山郁夫 (2 口)、斎藤秋子、佐藤ゆき子、佐藤純一 (2 口)、橘克子、沼野充義、原求作、藤沼敦子 (2 口)、吉岡ゆき (2 口)

日本ロシア文学会

2007/2008 会計年度決算報告 (2007 年 9 月 1 日～2008 年 8 月 31 日=前年度)

2008/2009 会計年度予算 (2008 年 9 月 1 日～2009 年 8 月 31 日=今年度)

I. 経常費

収入の部	前年度予算	前年度決算	今年度予算	備考
前年度よりの剰余金	1,427,117	1,427,117	1,427,117	特別事業基金新設
前年度からの繰越金	2,910,153	2,910,153	2,412,596	
(小計)	4,337,270	4,337,270	3,839,713	
郵便貯金利息	1,000	4,234	1,000	
学会費	3,200,000	3,410,000	3,400,000	20 万増 (納入率 85%)
維持会費	100,000	35,000	100,000	
入会金	20,000	16,000	20,000	
賛助会費	100,000	80,000	100,000	
雑収入	20,000	3,000	20,000	
(小計)	3,441,000	3,548,234	3,641,000	
合計	7,778,270	7,885,504	7,480,713	

支出の部	前年度予算	前年度決算	今年度予算	備考
総会準備費	300,000	230,000	300,000	2009 年度分 (20 万+会場使用料)
プレシンポ開催費	170,000	169,930	0	2008 年度開催せず
学会誌制作費	1,250,000	1,220,860	900,000	40 号 (本体 66 万+別冊 65 千円+送料)
交通費	900,000	1,358,000	900,000	節約策を検討
事務手当	240,000	240,000	240,000	
編集委員会	80,000	98,800	80,000	
国際交流委員会	60,000	40,000	60,000	
広報委員会	60,000	60,000	60,000	
ロシア語教育委員会	60,000	10,000	60,000	
マプリアール会費	25,000	22,198	25,000	
JCREES 会費	30,000	30,000	30,000	
学会賞	100,000	100,000	100,000	
事務費	200,000	134,350	200,000	
通信費	350,000	274,365	400,000	会長選経費 5 万増
印刷費	300,000	54,700	250,000	名簿 105 千円
会合費	30,000	2,588	30,000	
(小計)	4,155,000	4,045,791	3,635,000	
予備費	2,196,153	0	2,345,713	
前年度よりの剰余金	1,427,117	1,427,117	1,500,000	特別事業基金新設
次年度への繰越金		2,412,596		
(小計)	3,623,270	3,839,713	3,845,713	
合計	7,778,270	7,885,504	7,480,713	

II. 基金（2007/2008 会計年度決算報告）

1. 学会基金	2006/2007 年度	2007/2008 年度	備考
元本	2,500,000	2,500,000	貸付信託
利息	12,235	16,322	金銭信託
計	2,512,235	2,516,322	
2. ロソ文学シンポジウム基金			
元本	1,000,000	1,036,000	担保定額郵便貯金
利息	35,840	1,269	
計	1,035,840	1,037,269	

*2008/2009 年度より学会国際交流基金と名称変更
*2007 年 12 月 20 日に満期預け替え

*利息端数 780 円は経常費（郵便貯金利息）に算入

2008 年 9 月 18 日監査報告 監事：諫早勇一，西中村浩
2008 年 10 月 11 日総会承認

委員会活動記録

■学会賞選考委員会

井桁 貞義

2009 年度の日本ロシア文学会賞は 2008 年 4 月から 2009 年 3 月の期間に発表された論文を対象とするが、「日本ロシア文学会賞選考要綱」に規定された推薦論文が 2009 年 4 月段階でなかったため、前年に引き続き会誌『ロシア語ロシア文学研究』第 40 号の掲載論文を対象として選考が行われた。

5 月 24 日の選考委員会で、学会誌掲載論文の中から 4 論文を学会賞候補として選び、7 月 19 日に最終選考委員会を開催した。出席委員（井桁貞義，大石雅彦，貝澤哉，金田一真澄，黒岩幸子，杉本一直，沼野充義，望月哲男）で，北上光志，松本賢一，芳之内雄二各氏からのコメントを参考に慎重に審査し，学会賞に秋草俊一郎氏と八木君人氏，審査員特別賞に酒井英子氏を決定した。詳細は会誌第 41 号（1）を参照。

■広報委員会

草野 慶子

本委員会では，各種催事情報，会員著書刊行情報を中心に，引き続き学会ホームページの更新を行っております。昨年 8 月から今年 9 月までに約 40 件の新着情報がアップされました。

詳細は以下の URL にてご確認ください。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/robun/>

なお，本委員会では，広く会員の皆さまからの情報提供を募っております。御著書，御訳書を刊行された場合，ぜひご一報をお願いいたします。また，講演会，研究会，ロシア文化関係の催事，アート情報等も，ぜひお寄せください。

HP 担当アドレス：robun@abox3.so-net.ne.jp

■国際交流委員会

木村 崇

本委員会のおもな任務は，ロシア文学・語学研究分野での国際交流に資する催しを企画・実施すること，および国際会議，シンポジウム，テーマ別・作家別の研究会，講演会等に関する内外の情報を収集し，会員に迅速に伝達することのふたつである。

前者についていえば，今期本委員会はあれこれ議論したものの，残念ながら具体化にはいたらなかった。今期から来期にわたって，トルストイ没後 100 年を記念する企画に本委員会としても積極的に貢献したい。

後者については，グレチコ委員の献身的努力で海外の関連情報を定期的に検索し，有益と思われるイベントに関するリストを作成したが，広報委員会との連携に齟齬があり，「迅速な情報提供」という点では不十分であった。また会員自身の国際交流経験など，生の一次的情報を募って紹介し，双方向的な広報活動がなされるようにとも考えたが，ほとんど実現できなかった。これらの問題は，本会の広報活動全体を改善するなかでしか解決できないであろうと考える。

本会は諸外国で活動する同類の学術団体と頻繁に，あるいは恒常的に研究交流を深めているとはとうていえず，この「閉鎖性」が国際交流委員会の活動を不活発なものにしているといえよう。ところが個々の会員に目を転じてみると，国際的な場で外国の研究者達と積極的に研究交流を行っている人たちは，当委員会が把握するだけでも，すでにかかなりの数にのぼる。本会の国際交流活動を活発にするためには，全会員の国際交流活動の経験に依拠して展開するしかないであろう。そこで本委員会は来期以降の活動のための基本データを確保するために，全会員に向けて，国際的な研究交流についてアンケート調査を実施したい。これに関しては総会場で詳しくアナウンスする。

■ロシア語教育委員会

米重 文樹

『ロシア語教育関係書・論文・活動リスト』(2008年版)を学会HPに掲載した(2008年11月)。

理事会の要請を受けて、『初歩のロシア語教育に用いる用語のガイドライン』(1996)の復刻版を学会HPに掲載した(2009年4月)。

ロシア文学会も後援者となっている「第8回札幌大学ロシア語弁論コンクール」(2009年6月27日)の参加者への賞品補助として、当委員会の予算から1万円を同大学に送った。

支部活動記録

■北海道支部

・2009年度北海道支部会

2009年7月4日(土)北海道大学

研究発表会

前田しほ(北大):ペレストロイカ期文学における現実的なことの探求(司会:望月恒子)

鈴木理奈(札幌医科大):数量性の機能意味的カテゴリー(司会:高橋健一郎)

秋月準也(北大院):ミハイル・ブルガーコフ作品における住宅管理人(司会:岩本和久)

特別講演

栗原成郎先生:呪術の中の露西亜(司会:望月哲男)

総会

①平成20年度活動報告(理事会および北海道支部)

②平成20年度会計報告③支部役員改選ほか

■東北支部

・2009年度研究発表会・総会

2009年6月28日(日)東北大学

研究発表

中村唯史(山形大):バフチンの<対話>をめぐって

総会

①理事会・各種委員会等からの報告ほか

②次期役員選出について

③支部会計黒字分の使途について

インターネット普及により支部執行部・会員間の連絡にほとんど費用がかからなくなったため、現在のところ東北支部の会計は黒字分が微増し続けている。この黒字分の使い道として、支部外から何らかの目的で人を呼ぶことを今後考える。具体的目的・テーマおよび人選については支部会員全員でメール審議を行う。

④次回支部会について

次回支部研究発表会は2010年に岩手大学にて、また次期支部大会は2011年に東北大学にて開催予定。

⑤2007-2008年度支部決算について

■関東支部

1. 『関東支部報』26号発行

2008年9月1日

2. 2009年度春季研究発表会

2009年6月6日(土)東京大学

研究発表

池田裕香(東外大院修了):ロシア語とチュルク諸語の接触による影響(司会:白山利信)

堀口大樹(東外大院):ラトヴィア語の動詞接頭辞—アスペクトの意味と語彙的意味(司会:櫻井映子)

ヴァチェスラフ・スロヴェイ(東大院):日本語の文化的キーワードとその翻訳可能性—英訳、露訳、ウクライナ語訳に即して(司会:中澤英彦)

藤川(小西)美緒(東外大院):イコンにみるロシアの聖母崇拜(司会:伊東一郎)

松本隆志(早大院):アンドレイ・ペールイ『コーチク・レターエフ』研究(司会:長谷見一雄)

伊藤愉(一橋大院):メイエルホリドの演劇と観客(司会:浦雅春)

梶山祐治(東大院):パステルナークのドラマトゥルギー(司会:前田和泉)

覚張シルビア(日本学術振興会特別研究員):レフ・トルストイの作品における意識の境界状態の心理描写(司会:野中進)

大山麻稀子(横浜国立大):V.M.ガルシンとその時代(司会:金沢美知子)

竹内恵子(東大院修了):廢墟の詩学—プロツキイの作品における古典古代のモチーフと現代性(司会:坂庭淳史)

3. 2008年度総会

2008年10月11日(土)中京大学(2008年度日本ロシア文学会定例総会・研究発表会の会場で開催)

①活動報告, ②会計報告ほか

4. 運営委員会

2009年3月30日(月)と6月6日(土)に東京大学文学部で開催し、支部運営や事務局の体制、研究発表会やその他の活動の可能性について検討した。

5. 関東支部選出の理事・学会賞選考委員選挙

2009年7月5日(日)に東京大学文学部で開票が行われ、関東支部選出の次期理事候補及び学会賞選考委員候補が内定した。

6. 関東支部拡大理事会

2009年7月19日（日）に東京大学文学部で開催され、関東支部選出理事及び次期理事候補による協議の結果、次期支部長候補が内定した。

■中部支部

・日本ロシア文学会 2008 年度総会・研究発表会

2008年10月11日（土）～12日（日）

開催校：中京大学（名古屋学舎）

・公開講演会（2008年度支部第2回研究例会）

2009年2月28日（土）中京大学

望月哲男氏（北大）：『アンナ・カレーニナ』の読まれ方

支部会員および市民合わせて約 35 名が出席。講演会後講師を囲んでの懇談会実施（参加者約 20 名）。

・2008 年度総会・研究発表会

2008年6月28日（土）愛知大学

山路明日太（北大）：『現代の英雄』における主人公の模倣性

宮崎千穂（日本学術振興会特別研究員）：ロシアのジャポニズム—M.H.ヴォルコンスキーの『おしかさん』をめぐって

浅野喜行：1942年～45年終戦までの満州・北京周辺の話

総会

支部選出理事・委員、支部役員などを決定した。

■関西支部

1. 秋季総会・研究発表会

2008年11月8日（土）大学コンソーシアム大阪・キャンパスポート大阪（当番校：大阪市立大学）

特別講演

法橋和彦（大阪外大名誉教授）：不思議な国のレフ・トルストイ

研究発表

和田芳英（著述）：トルストイと昇曙夢（司会：前田俊行）

岡本崇男（神戸市外大）：人名 Гюрги という表記をめぐって（司会：佐藤昭裕）

総会

①新規会計年度（2008/2009年度）予算案

②支部顧問の選任規定の変更

2. 『関西支部会報』2008/2009年度第1号発行

2009年4月13日

3. 春季総会・研究発表会

2009年6月13日（土）桃山学院大学

研究発表

坂中紀夫（神戸市外大院）：否定性を媒介にした共同性の生起局面—イワン・オポチニンの自殺についての歴史社会学的考察（司会：大平陽一）

宮本宗実（京大名誉教授）：“未知なるもの”としての“нелепость”—『われら』の魅力（司会：萩原俊治）

ボリス・ラーニン（ロシア教育アカデミー）：Как Гоголь стал классиком: изучение Гоголя в русской школе（司会：楯岡求美）

秦野一宏（海上保安大学校）：ゴーゴリとドストエフスキ—гордость の問題をめぐって（司会：松本賢一）

総会

①次期支部長選出，②役員抽選，③役員選任規定の改正，④支部顧問推薦，⑤次期開催校の決定

■西日本支部

・支部総会・研究発表会

2009年6月6日（土）九州大学 西新プラザ

研究発表

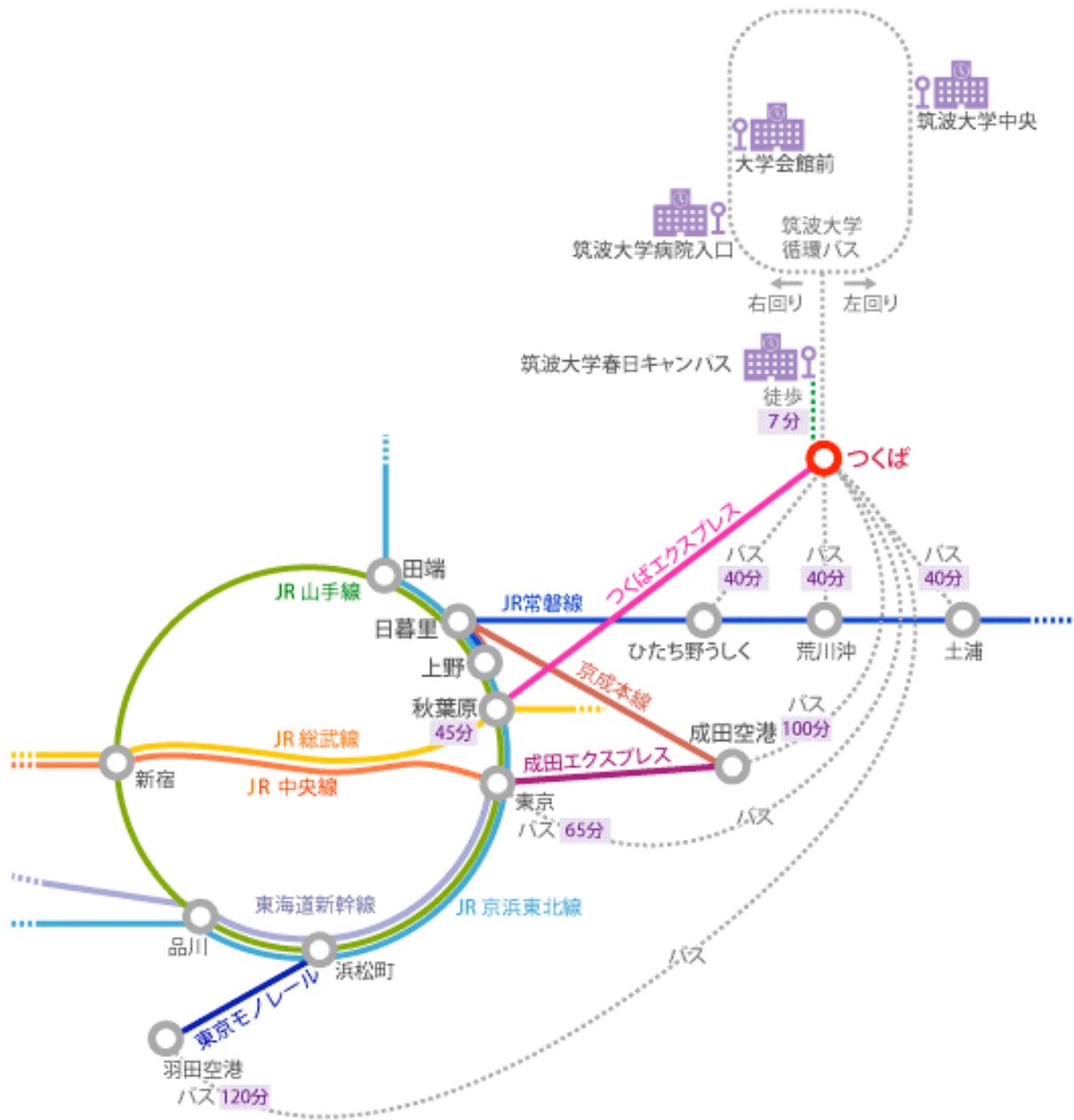
佐藤正則（九州大）：＜実在論＞を求めるロシア象徴主義者たち—＜実在性＞をめぐる二律背反

金子えつこ（四国学院大）：プーシキン散文における『軽さ』の文体論的検証

支部総会

①会計報告，②新役員の選出，③2010年度支部研究発表会・総会は北九州市立大学で行なう予定

筑波キャンパスへの交通アクセス



http://www.tsukuba.ac.jp/access/tsukuba_access.html
 (詳細は 5 ページ参照)

ロシア語ロシア文学研究 第 41 号 (2)

2009 年 9 月 30 日発行

発行者 日本ロシア文学会 井桁貞義
 〒192-8577 八王子市丹木町 1-236
 創価大学 C 棟 304 号室 寒河江研究室内
 日本ロシア文学会事務局
 042-691-4385 sagae@soka.ac.jp
 URL : <http://www.soc.nii.ac.jp/robun/>